

月

河海抄卷一

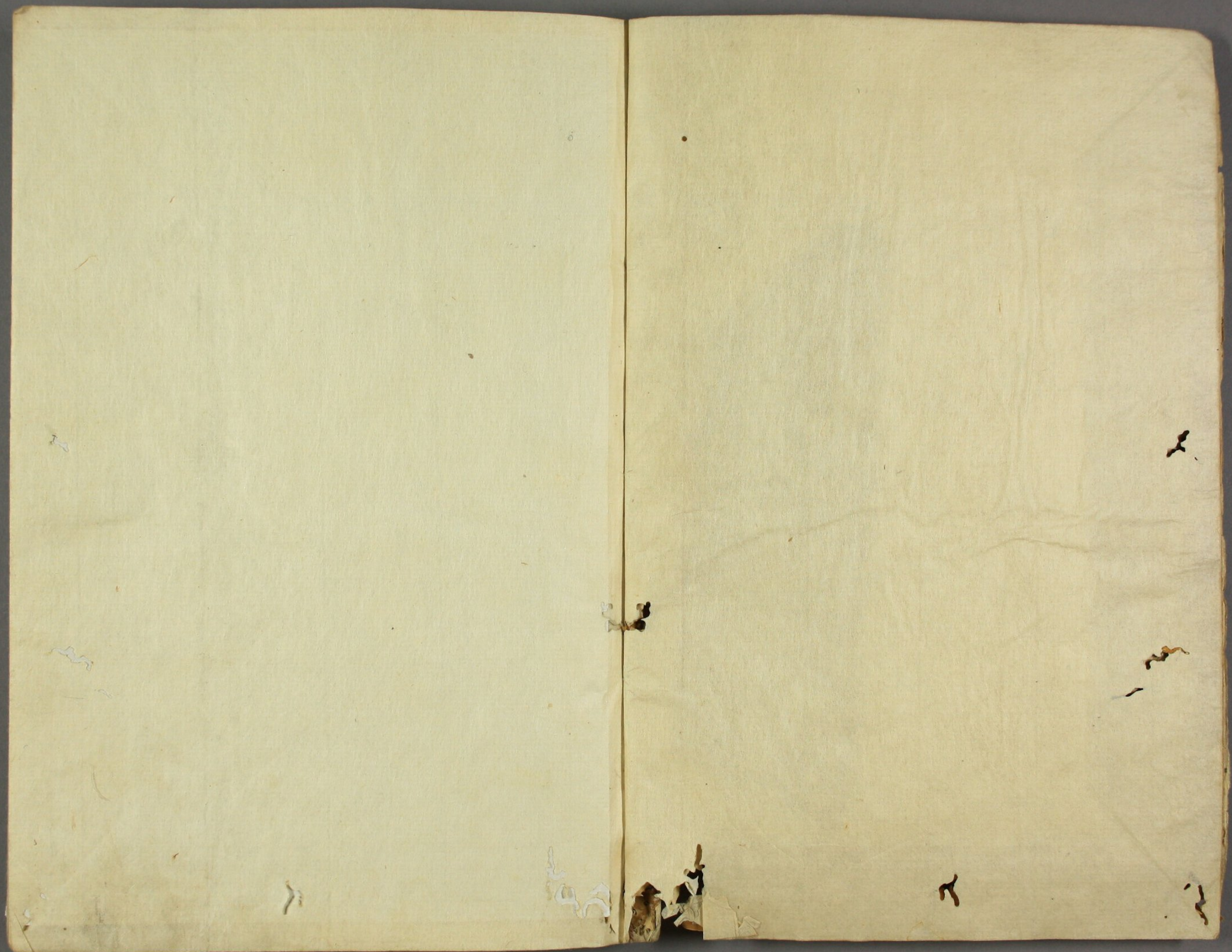
桐壺卷一

第本卷二

空蝶

夕顏





河海抄序

光源氏物語ハ寛弘ノ始ニ出来テ康和ノ末ニ廣クリニ
ケルヨリ世々ノ説ヒモノトシテ所々ノ枕コトナレリ其中ニ
中納言定家ハ卷々ニ難義ヲ註シテ奥入ト號シテ
大監物光行ハ家々ノ口傳ヲ抄シテ水源抄ト號セリ
シカレハミニアラス伏見仙院坊ニ御座シ時問題ヲ左右ニ奉
ラシメテ論談ノ勝負ヲ諍ハセシレ後醍醐院ノ御位始ニ
彼梨壺ノ歌仙ニ仰セテ萬葉集ヲ讀解シメシ
例ヲ寫サレケルニマ黒字ノ人數ヲ定メテ五十四條ヲ
講セサセラル義有シニ先師忠守朝臣七ノ流ノ底ノ
心ヲ極テ九重ノ中ノ撰ニ應セシカハ頻ニ顧問ニ預リ
テシハノ、秘説ヲ奏シキ爰ニ愁ニ和漢通ノ末ヲ請
テ遙ニ惟光良清カ風ヲ慕フ賤キ翁アリ桂ヲ
折道ヲ學ヒシ昔ヨリ樵カ本ノ宿リヲ尋ヌ今ニ
至ルニテ緑ノ袖ノ色ヲ替ヌ歎シ忘テ紫ノ筆ノ



廣江

跡ニ染ル志ヲ顯サントス此故ニ中葉ノ林ニ遊テ真
曲ヲ分チ前修ノ海ヲ汲テ深淺ヲ定ム自岩根ノ
松ノ人シレ又言ノ葉ヲヒロヒテワカニ軒端ノ萩ノ穂ニ
出スヘキカコトセリ集テ二十卷トス稱テ河海抄ト
云本来穂ノ螢ヲ眠ハス枝ノ雪ヲ鳴サレハ淺見寡聞
嘲リシ聊トイヘトモ故ヲ温テ新キヲ知ル媒トセシカ
タメニ聊コレシシルスト云コトシカリ

河海抄卷第一

正六位上物語博士源惟良撰

料簡

一 世物語ノ起リニ説々有トイヘトモ西宮左大臣安和二年太宰
權帥ニ左遷セラレ給ヒシカハ藤式部幼少ヨリ馴奉リ思歎ケル
比大齋院ヨリ撰子内親王
村上廿十宮上東門院へ珍ウカナル草子マ侍ルト
尋申サセ給ケルニ宇津保竹取様ノ古物語ハ目馴タレハ新シク
作出シテ可奉由式部ニ仰セラレケレハ石山寺ニ通夜シテ此事ヲ
祈申スニオリシモ八月十五夜ノ月湖水ニ移テ心ノ澄ワ先ニ
物語ノ風情空ニ浮ビケルヲ忘ヌサキニトテ佛前ニ有ク大般若ノ
料紙ヲ本尊ニ申請テ先須磨明石ノ兩卷ヲ書トメケリ是ニ
ヨリテ須磨ノ卷ニ今宵ハ十五夜ナリケリトヲホシ出テトハ侍
トカヤ後ニ罪障懺悔ノタメニ般若一部ハ百卷ヲ自書
テ奉納シケル今ニ彼寺ニアリト云云

光源氏ヲ左大臣ニ準ヘ紫上ヲ式部カ身ニ准テ周公且
白居易ノ古シ勅ヘ在納言菅並相ノ様ヲ引テ書出シ
ナルヘ其後以テ書加テ五十四帖ニ成テ奉シ權大納言
行成ニ清書セサセテ齊院ヘ進ラセラレケルニ法成寺
八道開白奥書ヲ加ヘラレテ云此物語世皆式部カ作ト
思ヘリ老比丘筆ヲ加ル所也ト云云誠ニ君臣ノ事仁義ノ道
好色ノ媒菩提ノ縁ニ至ルニテ是ヲ載セスト云事ナシ其趣
莊子カ寓言ニ同シキ者歎詞ノ妖艶サラニ比類ナシ一部ノ
中ニ紫上ノ事ヲ勝テ書出ス故ニ勝式部ノ名ヲ改テ
紫式部ト號セ之ケリ一説云藤式部ノ名幽玄ナラステ
後ニ藤ノ花ノ色ノ縁ニ紫ノ字ニ改ルルト云清輔朝臣ノ説也
亦或説云一條院御乳母子也上東門院ヘ參ラセラルトテ
我族ノ者也哀ト思召ト申サセ給ルニ依テ此名有武藏野
ノ義也トモ云リ或亦作者觀音ノ化身也ト云云

中山内府抄

水鏡云紫式部カ源氏物語作出シテ侍ルハ更ニ允夫ノ所行トハ
覽ヘ侍ラズ日本記ヲハシメトシテ諸家ノ日記ニ至ルニテ明ラカニ
悟リ持テ時ノ人日本記ノ局ト号シ侍トアリ凡物語ノ中ノ人
ノ行跡ヲ見ニ高賤ニ隨ヒ男女ニ附テモ人ノ心ヲ悟ラシメ事ノ
趣ヲ教ヘスト云一ナシ

一 物語ノ時代ハ醍醐朱雀村上三代ニ準スルカ桐壺帝ハ延喜
朱雀院ハ天慶冷泉院ハ天曆光源氏ハ西宮左大臣ト如此
相當スルナリ桐壺ノ卷ニ最初ニ兩所ニテ取分亭子院御更
シ載リ是御遺誠也此比明暮御覽スル長恨歌ノ御繪
亭子院ノ書セ給ヘルツノ枕言ニセサセ給フト云云又高麗人ヲ
宮ノ中ニ召シ事ハ宇多帝ノ御誠ヲレハト云云是御遺誠ナリ
又繪合ノ卷ニ朱雀院ノ御事ヲ延喜ノ御自筆ニ事ノ心ヲ
書セ給ヘルニ夕我御代ノ事モ書セ給ヘルトアリ又昭宣公ノ母ハ
寛平法皇ノ皇女延喜帝ノ御妹也致仕大臣ノ母モ桐壺帝ノ

一腹ト有此外モ其證多シ 難者云以前ノ準抄誠ニ其寄
有ト雖モ此物語ハ光源氏ヲ宗トスルカサレハ西宮左大臣
ニ準ル事一世ノ源氏左遷ノアトハ相同ケレトモ彼公好色
ノ先達トハ差テ聞ヘサレニヤ今物語ハ殊ニ此道ヲ本トスルカ
如何 答云作物語ノナラヒ大綱ハ其人ノ面影有トモ行跡ニ於
テハ強ニ事毎ニ彼ヲ摸ル事ナシ漢朝ノ書籍春秋史記ナト
云實録ニモ少シノ異同ハ有歟仍桐壺帝冷泉院ヲ延喜天曆ニ
準奉リナカラシ或ハ唐ノ玄宗ノ行跡舊様ヲ引或ハ秦ノ始皇ノ
隱タレ例ヲ移セリ又天慶ノ帝ハ相續ノ皇胤ナラシメサ子トモ
此物語ニハ朱雀院ノ御子今上冷泉院御後ナシ或説云此條ハ有作
者ノ意歟云云
光源氏ヲモ安和ノ左相ニ比ストイヘトモ好色ノ方ハ道ノ先達ニ
カ致ニ在中將ノ風ヲ學テ五條ニ條ノ后ヲ薄雲女院朧月夜ノ
尚侍ニ準ヘ或ハ交野ノ少將ノソリヲ思ヘリ又太上天皇ノ
尊號モ漢家ニハ太公ノ舊躡本朝ニハ草壁皇子ノ先蹤ヲ

摸ルカ是作物語ノ習也始ニ何ノ御時ニカトテ分明ニ書アラハサ
サレモ此故也去下ニ延喜ノ御時ト云心ヲ含リ此外ニ或ハ桓武
一條院ヲ桐壺帝ニ準シ又光大臣伊周公ヲ光源氏ニ擬ルト云
一義モアルカ皆以謬説也若桓武ト云ハ其己後ノ帝王陽成宇多
延喜ノ御名物ニテリ一條院ナラハ延喜ヨリ後五代ノ事ニハス其上
須磨卷ニ項上手ニスル千枝誣教トアリ兩人朱雀村上ノ御代ノ
繪師也此比ト云リ一條院ニテ存生セス又繪合卷ニ朱雀院ヲ當
代ノ由載之異論ナキカ

一 或説云此物語ハ必光源氏物語ト號スヘシ古源氏ト云物語
アヘタ有中ニ光源氏物語ハ紫式部カ制作也ト云云是今
案ノ義歟作者紫式部寛弘六年日記ニ源氏物語ノ御前ニ
在ヲ讀セ給フトアリ又水鏡ニモ紫式部カ源氏物語ト書リ
代々ノ集ノ詞是ニ同シ抑物語證本一樣ナラカ行成御自
筆ノ本モ悉今世ニタラハ源光行ハ八本ヲ以テ校合取捨

ニテ家本トセリ所謂二條帥伊房本冷泉中納言朝隆本
堀川左大臣俊房本號黃表紙從一位麗子本土御門左大臣女法性寺
關白本號尚侍故本五條三位俊成本京極中納言定家本號京極北政所也
等也各雜證本皆有異同古本且可加丁見者聊善表號
者從之古人之美言也

一紫式部者鷹司殿從一位倫子一條左大臣官女也相繼テ上東門院ニ
陪侍ス父ハ敏前守為時母ハ常陸介為信女也其祖先ハ
關院左大臣冬嗣次内舍人良門右中將利基中納言兼輔
因幡守雅正為時也後ニ左衛門權佐宣孝ニ嫁シテ大貳三位
辨高號衣生舊跡ハ正親町以南南京極西類今東北院
向也此院ハ上東門院御所ノ跡也又式部墓所ハ雲林院ニアリ
白毫院ノ南小野號墓西也宇治ノ寶藏日記ニモ此野ニ
雲林院ヲ由見ハタリ雲林院ハ淳和離宮也賢木卷ニ
光源氏雲林院ニテ六十卷ト云文ヲトカヒテ聞給シ所ナリ

式部ハ檀那院贈僧正ノ許可ヲ蒙テ天台一心三觀ノ血脉ニ入
リリ兼テヨリ紫野雲林院ノ幽閑ヲ思シタケルモ旁故アリニヤ
一中古ノ先達ノ中ニ此物語ノ心ヲハ歌ニ詠ハカラス詞ヲトルニハ苦シ
カラスト云一義ヲレトモ心ヲ取タル歌撰集ノ中ニ多ク見エタリ

續拾遺集

かろめやは心れやももろ計極の里しそあつる月影控中納言俊忠
ト讀ルハ彼松風卷ニ思ハ咽心ハ嗚モ元ヤリト充心ト聞エタリ
同拾遺集

あさりし神トイフあまのあかき心トイフ懐乃ろろ典侍親子朝臣
浮舟ノ君小野ニテ異花ヨリモ是ニ心ヨセノ有ハアカカリニ
白ノシニニケルニヤト云ル心也

新古今集

白雲以情トイフささるるを思ふはほろくろくしり魚トイフ不トイフ 前右大臣
續古今集

神乃其見... 後醍醐院
小竹松
光佐朝臣
是言... 詞取奇新古今二
ひの... 見...
あり... 續古今二
たし...

ナトイハ... 猶本歌二用ニ... 六百番判詞ニ... 狀ニモ則永清輔モ源氏ノ見候共ニウタテキ事ト被載タリ尤和語之與造成者也

光源氏物語卷第一 桐壺卷

桐壺、泚景舎也此所曹司... 盛成ト有奥入ニ云或說此卷分與端有桐壺壺前裁ノ名云云 是謬說也亦一卷二名也桐壺者正說壺前裁者異說也云云

川原院ノ某院鞍馬寺ヲ北山ノ某寺ト云カ如シ伊勢集始云 何ノ御時ニカ有ケシ大御息所ト聞エケルト云、是等例歟御ノ字

女御更衣... 更衣周子ノ御腹ニ高明御子源氏ノ姓ヲ賜リ給シ也 醍醐 天皇後宮 朱雀院村上母后 后太后宮藤原朝臣穩子 中宮藤原 穗子 從二位 妃 為子内親王 光孝天皇ノ女 贈從一位也 女御 正二位源朝臣

和子同皇女承香殿女御 同山五位下藤原朝臣仁善子右大臣定方女 同欣子元更衣同人女
 同和香子定國女 同姬子藤原親王母 更衣源封子 滿子女王
 藤原鮮子伊与介連水女 同泚姬源國朝臣母 源園子 同定子
 滋野幸子 源柔子 同清子 同俊子 平亮子 源暖子
 同栗子号近江更衣 同周子左大臣高明母 仲野親王女亮明親母
 大納言源昇女重明親王母也 中納言兼輔女璋明親母 套衛督敏想源允明母也
 參議伊明女源為明母

桐壺帝後宮

薄雲女院先帝第 弘徽殿太后二條太政大臣女
 承香殿女御四皇女 麗景殿女御朱雀院二品宮前尚院母
 桐壺更衣贈後三位按察使 女御宇治八宮母 後涼殿更衣
 前尚侍柏木卷出家女 女御事吉備上道女也 為女御是女御始也
 雄略天皇七年求雅媛雅媛

漢朝有八十一女御見周禮後漢書等

周禮曰女御叙於燕寢以歲時獻功事亦云王者妃百九人
 后一人夫人三人嬪九人世婦二十七人女御八十八人三夫人論獻人
 鄭玄曰夫人之於后猶於王如三公之從容論禮九嬪比九卿
 九嬪掌婦學之法以教九卿也四德謂婦德容婦言婦容婦
 功也二十七世婦主知喪祭賓客婦腹也明其能服事於人也
 比二十七大夫 後漢書曰以備內職焉后正位宮闈同躡天皇
 八十一女御序于王之燕寢御謂進御於王也此八十一之士
 皇代記曰桓武天皇女御從三位橘三井子從四位下入鹿子

更衣事

仁明天皇承和三年正五位上紀朝臣乙奘被授從四位下為更
 衣柏原天皇更衣也是更衣初也 漢書考章曰更衣者
 被使也園中有寢便殿寢者陵上正被使者寢側之別殿
 更衣也 註曰時於軒中侍帝權主衣裳

案之更衣被使也。主上御衣ナト着シ替給所也。故号ニ更衣ナ
歟。亦寢側之別殿ナリ。故ニ更衣ヲ御息所トモ称ス。歟。休息ノ
義也。水原抄ニハ更衣後ニ見御息所ト猶昇進義歟云云
唯何モ同事也。女御息所ト書ル古本モアリ。

史記云是日武帝起更衣子夫侍裳軒中得幸上遷坐驪
甚平陽王金千斤主同奏子夫奉送入宮子夫上車尚主也於主衣車
中得幸也漢書註曰時於軒中侍帝權主衣裳

案之車中而后妃衣服庶女之服ヲ着シテ幸仕ル故ニ
号ニ更衣歟。本朝更衣四位相當也。

上卿要抄云更衣事 尚侍宣下諸司着禁色云云

いと心なごきしきほふあゝぬが
亦停事也 花容無止 見万葉

無止事也

すくられてしめれしふありたり

絶妙也 見日本記

時上同 メクハヨミツクテニハ也

生ノ字ヲモテニメクトヨメリ

亦人メク春メクナトモ云リ

めづまうしそめ

曉目覚草也 見万葉 奥入水原抄等ニ

載之不審也案之此義別事也詩作冷眼此心也譬ハ
冷ク見エタル也ソ子ニ先様ナリ心也

おとめろくろく

劣 陥心也

いそあけくかり

後漢書四生男如狼猶恐其庭生女

如鼠恐其武 伊裝諾尊神功既畢

靈運當遷 見日本記

亦劣也或庭也弱故曰庭順和名 或曰支離也 定家卿說云

アヤウキ心也云云 日本記之如ハ病ナトノ事也

大都ハ同心成歟

かんぢらめう人 工達部也 殿上人也

あつちめをうめは

無愛也 史記曰時人見郅都側目

号ニ蒼鷹

莊子註曰桀紂何得守斯位而放其毒使天下

側目哉 弄十脛篋

未容君王得見面已被揚妃

遙側目 白氏文集三樂府上陽人 京師ノ長吏為是側目
長恨哥傳ニ陳鴻也

毛絲 周幽王ハ褒姒ヲ寵シテ天下ヲ乱唐玄宗楊貴妃ニ
至ルニテ其例多シ

あめめ 御宇日本記 御島 宇内 天下 同

御宇天下 同 率土 周礼 天表 遊仙

あらしさめ 無為也 史記高記 白氏文集 古語拾遺 無道也 日本記

無狀 同 無妻 遊仙 何須也 無情也 同 無端也 舍利式

いし 同 伊勢物語真名本ニ

同物語註曰ハシタナシトハタラヌトモナキ也 物ノ不足ニタラヌヲ
ハシタナシト云也云

無比也 亦々堂也 上同 無類也 天 忝 上同 見日本記

ちのり大納言 天武天皇元年改御史大夫ハ蘇我景安臣巨勢比

登臣紀大臣以上三人始任大納言 異朝上古少師少傅
少保是三孤亦云三少也 三公之貳也 助也 故云亞相 漢

以来為御史大夫者時轉兼相依之亞相之号而御史之職
相當今之彈正其義參差歟稱德天皇御宇暫雖大納
言御史大夫是故大納言唐名称御史大夫不叶旧式者也今曰
正負四人相當位三位 寬平為正二人権一人其後權加増 順德歟 高倉
御宇初為十人

後漢書云陽

以博旋為德陰不專為德 男ハ南女ハ北向ニ謂可
往也 陰陽ニ司ル故歟 仍貴賤共ニ妻室ヲ北方ト号也
后妃ヲ号椒房北向ニ任給故也云云

をたばはる 聲華也 白氏文集ニ
振也 亦無頼也

さうされをめもさびたやありせんい〜さう〜なる

君トウレイカナルコトヲ契リケムカシヨコソシラニホシケレ

キヨウノ清也伊勢物語云寂清ラ九ラソソク上ノ衣云云

玉れわのこみこ

毛詩云生芻一束其人如玉亦曰有女如玉德

如玉箋云德如玉者取其堅而潔白也河陽花作縣宿浦玉
為久玉人ト云 褒義之詞也

日本記豐玉姬哥也

アカ玉ノヒカリハ有ト人ハイヘト君カヨソヒシタフトク有ケリ

アカ玉トハ子也子ヲ玉ニ譬タル也 日本記云豐玉姬其尊キヲ

キラシキユトヲ聞テ親トテ亦帰テ養ント思ヘ共ヨカラジトシボシ

テ玉依姫ヲ遣テ養セ給時ニ豐玉姬之尊玉依姫ニ寄セ

テ読タニハル哥也

めづらうらんちこのはは〜らあり

老子道德經曰民多技巧

奇物滋起法令滋彰盜賊多有 註曰法好也珍好之物滋生

彰者則農事病飢寒 梅豆暹 日本記

亦珍愛 珍奇 遊仙窟

右大臣

三月申食國政大夫出雲色命為大臣見四事本記崇徳天皇二年

三年秋八月丙申朔丁巳大臣景行天皇御宇初以武内宿禰為

棟梁臣成務天皇三年二月癸酉朔己卯天皇後武緒命子以武内宿禰改立大臣

仲哀朝亦以大臣武持号大連相置知政事皇極天皇四年己巳

始置左右臣止大連孝徳天皇大化元年六月以阿倍倉橋丸為左

大臣以藤我山田石川麿為右大臣以大職冠中臣鎌子連為内大臣

大臣馬子大臣藤雄云子臣子太政大臣左右大臣謂之三異朝三

大臣異朝三謂之三異朝三大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三

大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三

大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三

大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三

大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三

大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三

大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三

大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三大臣謂之三異朝三

干諸官^{塩梅}干帝道者也師以道而教謂之師傳以義而記謂之傳保能守道謂之保秦漢以來有相國左右丞相之号已知庶政異千古之三台也三台者象天之三台星也三槐者周世外朝植三槐三公班列其下槐者懷也懷遠人之義也我朝天孫天降給時天兒屋根命^{中臣}天太玉命^{高祖}奉天照太神勅為左右之扶翼如今之左右相欽神武天皇東征之後天下者一統也二神之孫天種子命天富命亦為左右上古無大臣号喚執政人稱食國政申大夫

儲君也

儲皇也

案之桐壺更衣此卷二或故大納言イマハトナレテ唯此人之宮仕ホイ必トケサセ奉レト云亦ハ故大納言遺言不違宮仕ハ父ノ遺命尤本意之事トキコハル今爰ニ上宮仕シタラフキキハニアラフ又ト云

一往不審有ニ似タレ再ニ見ニ次ノ詞ニ強ニ御前サラズモテナサセ給シ程ニシクツカラカヨキ方ニモヒヘシツトアリ女御更衣ナト曹司ニ候テ御トノイニシクホルハキニ此更衣御寵愛之餘御前サラズレハヒタヌラ宮仕ノフトクナラ不成本意云欽シシナハテノ上宮仕ト云此心欽父素意ハ女御更衣ノ為望欽一義云此更衣父ニ無ク成而後ハタヨリナキニヨリテナハテ上宮仕ナトアルハキナラ子ド心バナダラカテ世ノシホヘヤシトナシト云欽 水原抄ニ

まづかきまといさせ給あまのり 無別 暴記 無破也 纏也

まづまのりぼもいさす 參進也 暴記 或馳上 亦參上 同 啓 同

おぼしきとてはれ 旋テ

坊よりとてせむ 春宮坊 職令 不用 不能 不善 記イハバト

うしこきしきげとて 恐心アリ 可畏之神 日本記 恐惶 同 万葉ニ

水原抄ノイハカシヨシ岩ニヨリ
コキナグリニセ月ハヌトモ
カクニモカシテ共
本ノ終

拾遺 初ナレハイトモカシヨシ寫ノ
宿ハトハハイカバコタヘ

ト云心也

くくはくさばらめいあ 内藏寮 納殿 在後涼殿

わらわすけとてわらわす 言也人丸奇ニ言也

こくくまのつぐ 言ニ出テイハハニシラサカホハサキイデ又コヒモス哉万葉ニ

たゆげみて 隨齋史記ニ 薩 後景友落也懈也 見玉篇

かきくくと 柔也 マハラセ 或云ナヨヒカ同心欣但ナヨヒハ麗ノ字也

疑程ニヨハキ心也 興也 我耶人耶ナト

以王青蓋車迎入宮中 仁明天皇女御藤澤子紀伊守贈左大臣總繼女

依病退出之時被聽轎車卒逝之後以少納言被贈三位云轎車ト
石橋之高キ門ヨリ登リ中重ヲ出入之為也 中重ノ轎車ト
モ云牛車ハ牛ノ寄几所ニテ乘也 牛車ヲ聽テ上東門ヲ

出入仕也職負令曰輿輦 註曰舉行曰輿輓行曰輦也崔豹曰
黃帝与蚩尤戰於涿澆有五色雲金枝玉葉止于帝上有花
葩之像因而作花蓋輦周礼皇后玉輅輦且輓有羽蓋鄭玄曰
后居宮中從容乘也輓輪人輓以行司馬法曰夏后氏謂輦曰茶
車殷曰胡奴車周曰輜車亦曰夏后氏二十人而輦設十八人而輦
周十五人而輦 尔雅從御而馬輦者也輓音无阮友周礼ニ
我車但輓 鄭玄曰為輓輪人輓之說文引車也
後漢書曰挽車而去挽引也 卓茂傳
贈官位事 大寶元年始之于時大納言正廣參大伴御行
宿祢也女房贈位例有前

イキホシキ也 生也 或說ニイカニ也 傳教大師
文德實錄云延曆廿四年春 寂澄大師入唐以後 圓澄
法師依詔於紫宸殿修五佛頂法即預得度 五朝修法

延曆寺第一座主

いしあえあて 寂無教也 專イト

沙はう方ゆきふほごも

交加 ニキカラ

源氏之采也

遭母喪事

文彦太子三歳時 左大臣時平女薨也

いふふてても沙らんびまり くれむもつるほごさうい
いふふててもいふふててもいふふててもいふふてても

無服殤假事

假寧令云每服之殤生三月至七歳本三月給暇三日月
服百七日服百義解云謂未成人死曰殤謂其五岁以上服親每
每服々殤故云本服三月也案之生三月至七歳本服三月以
下可有之其於五岁以上服親每之殤故隨彼本服宜假
限云矣 德曹至要抄 人生七歳以前母服之殤也源氏三
歳而遭母喪專服假不可有歿但本服三月之義モ有歿
中品ノ日也此物語ニモ宜キ日トアリ但万葉ニ 物ハ皆新キヨシ人ハ唯
古又ルノミソヨロシカリケル

愛宕

是ハ善キ義也可隨所歿此哥ハ尚書ニ器貴新人貴曰ト謂心也

桓武天皇平安城遷都之時此地ヲ諸人之葬所ニ被定

彼有珍皇寺ト云寺弘法大師之聖跡トシテ今東寺ハ

長者管領也云大師遺告書云字宕當 右寺建立大師

吾祖故慶俊僧都也道慈律師弟子ナリ以下畧之清和天皇外祖母贈

二位源氏喪山城國愛宕墓 見延喜式

ひの

ひの

ウツヒニハカフヲミツクモサクスサメウ
フカヤノマニケフリダニタテ

文武天皇四年三月己未道照和尚近化七十三

本朝火葬自此時始也モ五果テ快トナリトキニユツ 一乃葉ニ

ひふ 五ニ敢死一切目 永迅順和 永頃同 甚振布モロクハフニ

伊勢物語ニハ雲抄カク意ニタフ心ハ一向亦フテタ九

由也案之ヒタスラナト云心ナリ

女侍と云ふもいふを成ぬるが 侍臣女猶女侍之例有其上大中
納言女立后之例カモアバ女御トカト云歟カニ猶不足ノ
心歟中古ニテハ女御モ多ク四位五位也近代者叙従三位
後ニ女御有宣下也

大中納言立后例

藤原高子 故中納言 長良女 二條后也 皇子宫城子 故大納言 清時女 三條
院后也 贈皇后超子 法興院入道 開白女 父干時 中納言 冷泉院 女御也

公卿女為女御例

女御藤原元善子 光孝天皇女御 中納言山蔭女 女御橘義子 宇多院女御 恭議廣相女
女御藤原和香子 醍醐天皇女御 右大將定國女 女御藤原洙姬 同女御 恭議 菅根女
女御藤原姫子 北山院女御也

侍臣女為女御例

女御従三位橘三井子

桓武女御後 四位下入鹿女

女御北藤原澤子

仁明女御 紀伊守 總繼女ナリ

女御贈皇后藤原超子

冷泉院女御 安和元年十二月七日為女御 干時父法興院入道 藏人ナリ

心操 平日本記 朽論語澤詩

心操 平日本記 朽論語澤詩

心操 平日本記 朽論語澤詩

心操 平日本記 朽論語澤詩

心操 平日本記 朽論語澤詩

無墓也亦無計也 式量 無道也 日本記

無墓也亦無計也 式量 無道也 日本記

無墓也亦無計也 式量 無道也 日本記

無墓也亦無計也 式量 無道也 日本記

無墓也亦無計也 式量 無道也 日本記

後何妻モオホシメサレズ、シキマデニ見ハサセ給此程ハ女御ニマス
所ノ御トイタハタリ

古今集

古今集

古今集

弘徽殿

弘徽殿

弘徽殿

弘徽殿

大同三年七月廿日以衛門府併清土府亦以

勅負名号同左右勅負府者常門府見職職負令云内外命婦
註曰謂婦人帶五位以上為内命婦五位以上妻曰外命婦也亦後宮
職負令云其外命婦准夫位次故周礼曰内命婦謂九嬪世婦
女御也外命婦謂卿太夫妻也ユケイノ命婦ハ左右衛門佐也命
婦ハ五位女藏人六位也勅負藏人モアリ婦人之五位以上ヲ帶
スルヲ内命婦ト云五位以上之者ノ妻ヲ外命婦ト云令文也
漢家亦大概是同シ但内命婦ハ九嬪世婦ヲ云トシ本朝ハ可替
礼記喪大記註曰世婦ヲ為内命婦ト卿大夫之妻ヲ為外命婦
毛詩註曰公イ夫人ノ識沆誕鄉之内子ハ大帶大夫之命婦成祭服
士ノ妻ハ朝服庶士以下ハ各衣其夫葛覃註續日本記曰延曆二年
春正月戊寅日朔廢朝也是日勅内親王及内外命婦服色有限
不得僭差スナフ分庭皆命婦對院即儲皇白氏文集新古今ニ東三條院
女御ニ御座ケル時同融院常ニ渡給ケルヲ聞侍テユケイノ命婦
モトニツカハシケル春カスミタナヒキワタルオリニコソ
カ、ルマニバモカヒハアリケレ東三條入道前

攝政太政大臣

ゆふづくよ

暮月夜万葉ニ夕附夜上同

亦日本記ニモ

やとれうほふのむら

礼記曰少而無父者謂之孤

老而無子者謂之寡

やとめづしむら

謂之獨老而無妻者謂之鰥老而無夫者謂之寡此四者

天氏之窮也戸令曰鰥寡孤獨也註曰謂六十一以上而無

妻為鰥也五十以上而無夫為寡也十六以下而無父為孤也

六十一以上而無子為獨也此更衣之母義モ其年齡歟

伊勢物語云昔男ヤモメニ居テ

イカニシカキコトナルハ

伊勢物語云昔男ヤモメニ居テイカニシカキコトナルハ

伊勢物語云昔男ヤモメニ居テ

伊勢物語云昔男ヤモメニ居テ

伊勢物語云昔男ヤモメニ居テ

伊勢物語云昔男ヤモメニ居テ

伊勢物語云昔男ヤモメニ居テ

伊勢物語云昔男ヤモメニ居テ

伊勢物語云昔男ヤモメニ居テ

伊勢物語云昔男ヤモメニ居テ

よとぞれ病分入るまふくはをてし
拾遺イカテカハ尋来ツラシヨモギフノ
人モアヨハ又ワカマドノミチ
げまえたまふまじくたひぬまふ
一眉 猶巨耐 雙眼 定傷人

遊仙窟ニ

かいたりりてけ 尚侍 典侍 掌侍

や、たたりしひて 杖行 白氏文 集十三 聞健詰 八雲抄云マハ漸也較也 跟踪

いとけり人々を 雅也 幼也

命かぞれいしつら 思たはるらるる 壽者多辱也 莊子

松のふもをいむとむみまづ 樹カニシテアリトシラシ高砂ノ
松ノカモハシツモハツカシ

或ハ百城 葛城或 文選ニ金城百雉ト云リ若此事歟雉ハ高一尺

廣三尺云築地之一筭也其ヲ百許ツツケタ也ユキカハ行通也

カハ交ノ字也夏ト秋ト行カフ空モ行遠也

古今テニカリツツ行カレチトソヲモヒシ 滋春

松 今ハカリノカトテナリケリ
口ハ又レハ常ハユ、シキセタモ
ウラマニレヌモノニツ有トシ

人丸 子、シトテイム臣今ハカヒモアラジ ユ、シキハ善惡ニ通ル詞也

然面多ハイマイ、シキ心歎忌字也

くもまきふん乃ヤシとくふんちり 後撰奥入ニ

人、親心ハヤミニラ子トモ 諸集一虜 八雲抄云カタハ迄傍輩

子ヲオモフニ迷スル歟 躰也亦カツハトモイハル心也

ねもた、し、し、面立 面目心歎 目タ、シキ同心歎

思ハハるをまき 類墮也

かくし、は、トツ 伊勢物語真名本ニ

よこさまのや、 鉦文ニ九有横死其中ニハ者横ニ為毒藥

むよいきりとも人れんまげ、るこしハ、めしと、おひ、を 厭禱咒咀起屍鬼等之所中害ト云リ 藥師經ニ

ト、メ、ハ、傳、止、義、也、定、家、郷、自、筆、本、ハ、ト、メ、免、ト、思、シ、ヲ、ト、アリ

人、ろ、ろ、く、わ、く、あ、ま、頑也

志、ろ、も、ご、ら、ま、神事式ニ 泣、ハ、盛、垂、ト、云、也

東村れしのなるぶとよきかりり一説云虫ノ聲クモ

夜リ顔也トヨムシ哥ニモ永夜ヲカストアリ其心也是
秘説云云案之此義不耳心今時非曉更何可惜夜哉
夕月夜入方之程也非可惜夜哉

茶れもり古哥詞未勘 蓬カモト同風情歎

いいのの志（いのあらぶふるるをらりと人

母ノ服ニテ里ニ侍ケル比醍醐帝ヨリ無常ノ御文給らる返
事ニ近江更衣ノ奉リ元五月雨ニ又レシ袖ヲイトシ
露ヲキソケル秋ノワヒサ

のこももいいづらん カコトハ所ニヨリテ其心カハルシ是ハカユ
義ナリ 誓ハカテ心ナレ 誑同恨心也 少事 聊ナル心 而路ノカコトナ

トノ心ナリ 伊勢ニアツキテトニツキテシラテ伊物ニトモシレモトケテクニ
東路道ノ果成常陸帯ノ 東路道ノ果成常陸帯ノ
カハトバカリモアハトソ恩フ

沙しのこももいいづらん 記念也 遊仙窟ニ信

沙しのこももいいづらん 一ク名ハ願ハ長恨哥ニ序ニモ詩ニモ每如何

いいあらぶれでらどめく物 調度也昔ハ女御更衣以下ハ常ニ

髪ヲアケル、本義也仍髪ヲケノ調度共ラ廣蓋ニ入
タル也 鈇釵子ナド也 天武天皇十一年六月丁卯男女始結髮

続日本記云大宝二年十二月乙丑令天下婦女自非神戶
尙宮人及老姬皆髮髻 延喜十六年秩父牧馬

賜左大臣御返事

いい寂寞 和名 或陶 延喜御記云事始

余カモ有御馬等好乎 御厩ハ 不侍 天波カ左字カクク之久

可有余目元祭年 奉入留

いい影護 和名古今ニ女高花後メタクモニユルカナハ
アレタルマドニヒトリタテハ

速欣興ハ 或清々 日本紀素戔嗚鳥 遂ニ到出雲之清地
乃詔吾心清ニ

いいかまる人乃ハ此ほせんハいいづらん 清涼殿東庭并西庭朝餉并臺所前被載
前栽延喜元年左右衛門栽草架

壺前栽 中宮カクセサセ

給テ秋御前ノ露ヲ御覽シテ 秋風ニナヒク草葉ノツユヨリモ
キハニシ人ヲ何ニタトヘン
天曆御製也

長恨秀乃沙忍亭子の院此の也 伊勢集云長恨哥之御畫之屏風亭子院
伊勢集云長恨哥之御畫之屏風亭子院

ニイナセ給テ所々ノ名ヲヨコセ給ケルニ御門之御手ニテ
紅葉バノ色ニワセカフルモノハ
モノヨモラ秋ノ泪ナリケリ
亭子院七條以南油小路以東一町也

そり 詩言志 詩永言トイヘリ 詩哥已各別
歎但是ハ詩ヲモ哥トヲシコメテイヘルナリ

まろ 枕言也 枕草子ナト云 軀也 奥入ニ譬ハアケクレノ
コトクサト云心ニ一説云 枕子也 本朝月令ニ見タリ云

ちり 足寒時心乱也
長恨哥傳

指碧衣女取金釵鈿合各折其半授使者曰為我謝太上皇
謹獻是物尋舊好也

る 幻術士之各也 玉アリカ魂在所也

たい 柳也 太液芙蓉未央柳對此
如何泪不墜 長恨哥ニ俊成郷本ニ未央柳之句ヲニセケテ
シケリ是ハ行成郷自筆ノ本様云 親行云六條院之女樂ニ

女三宮ヲ二月バカリノ青柳ニタトヘタリ人ノ白ヲ柳ニタトヘ
先一一部ノ内ニ有兩所每念成ニ似リ然而芙蓉柳是亦
何モ除キ難キニ依テ書ニセケケテニタレ歎

け 本ノ俗也
後一位麗子ノ 本ニハ

シバチノ風ニナヒキ先トアリ 或本ニ此句ナシ
亦麗也

ら 勞 良 亮 日本記ニボケガトシ
貞借改要

花よりけりけりけりけり

後ニ花鳥ノ色ヲモ音ヲモイタツフニ
雅云

春櫻鶯夏橘郭公是等ヲ花鳥ト云定家御説
案之菅家
御作ニ花鳥

あさひのつらくさめい
言種也

羽をあらば枝をかきん
在天願作比翼鳥在地願為連理

枝長根 今雅疏曰南方在北翼不比不飛其名謂之鷓似
鷓青赤也木連理者仁木也見晉中或異本同枝或枝旁出上
更遮合也孝經援神契云德至草木則木連理 孫氏瑞應
圖云王者德化洽八方合為一家則草木連理 以上符瑞圖
符瑞圖云比翼鳥者名曰鷓見亦雅一名蠻々見山海經
其狀如鷓而一翼一目其色青赤如南方崇吉金門々山結
胸國東不比不飛見山海經 今雅ニ孫子瑞應圖云王者孝德
明至山海經云見則大水 天曆御集イキテテ世死テ後ノ世モ
御返哥ニ秋キギルコトハタニモカラスハ 女御芳子宣耀殿
ワレモカセル枝トナリナシ

連理仁木也漢武帝元狩元年ニ生リ其外不可勝計

いとくさくさかたかく
寂押立才日本記才学同 廉々也

ととく火をくげつて
長恨哥 夕殿螢飛思悄然ナリ

孤燈挑盡未能眠

右邊れけりけりけり

亥一剋左近衛夜行官人初奏時終子四剋旦一剋右近衛宿直
申事至卯一剋内豎亥一剋奏宿簡

よるのわらわ
夜御殿涼殿有清四方ニ有妻戸南ハ大妻戸一間也

御帳同ク清涼殿東枕礼記曰疊御座敷也有御枕ニ階神

壘宝劔ヲ被為案有覆若也見建曆御記壘之御為也御帳之南西北ニ

疊敷テ女房之座トス

あつてもさくさくさくさく
玉スタレアクルモシラテ子シモラ

かをあさひのつらくさめい
夢ニモ見シトオモヒカケキヤ

春宵苦短日高起
從此君王不早朝
見長恨哥ニ

あまぐれいせき... 朝餉間二間也於此所朝夕供之

南ニ平敷ニ枚^上東北ニ立詣屏風夜御殿方ニ副障子
御屏風之内外ニ素御調度ニ階唐匣^二莒硯箱莒螺鈿
厨子ニ脚冠莒^二嚙莒^一手拭莒丸帳一大床子ニ脚被^二墨^一之春
冬^二圓火櫃^一有和繪也陪膳上^二臈女房^一典侍候朝餉南間
端中臈^{内侍或}障子^{小上臈}外候シテ取傳下臈得選以下次第^二
傳之朝餉^二ニ女房^一皆上髪三位以上ハ劔子許也女房不候
之時ハ公卿或四位侍臣為陪膳例也昔ハ禁野交野等
鳥御鷹飼舎人付御厨子所進之建曆御記

大^二ビド^一のあまの 天子着セ給床子也号畫御膳

大床子之御膳上古ハ朝夕供之近代一度也昔ハ主上着
御正^二食之^一近來不然左波^二ヲ取テ御箸^一被立陪膳其
御箸^二ヲ取テ亦立御箸^一折之出無出御時ハ女房鳴^二扇^一
ニ^二音其時陪膳人^一撤之 陪膳藏人^二以下四位

北

侍臣役送四位五位六位隨候有陪膳番仍從陪膳
上首^二モ役送常ノ事也^一上古ハ公卿陪膳モ有之歟亦女房
陪膳也 見寛平御才識

だうりつをしまげさあひひ... 狂也 亦曲也 此字不審也

断^二クシキ歟^一アイウエヲノ五音通ル也 事態 奪^二何^一ヲ我言ガ天照ヤ
未哥^{イカカリヨキウカシテカ天照ヤ晝目ノ神ヲシトメシ}

いとあこいぶあしきまでいふりてさめさかひけさきり
私語^{長根哥} 耳言^{万葉ニ} 楊貴妃失テ後ニ玄宗位ヲ去給事也
是モサウニヤハシシラントナゲキケルナリ

あつるし... 朱雀院
年十有五^立為皇太子^{神武天皇十二年立}神^二津名河耳^一尊為皇太子^{神武天皇十二年立}
よれりあひくまじり... 兼引也
よひいとさきつてえ 御諱字也 世ノ人トヨムハシ

りれかむさうり方 ヲハトハ祖母ヲ云也若紫卷ニモ在之源重之

母ノアツミノコウニ侍ケルニムニコノアツミヨリノホリテイソクイ

トテエ此度逢テホリ又ル事ト云テ侍ケル祖母ノ女読侍ケル

親ヲラト思ハシカトヒテシ我子ノ子ニアラヌナルヘシ

皇子七歳御書始例 村上天皇 親玉時承平 一條院 寛和二年

天物部等廿五部人同帯兵仗降供奉

本記物部氏之遠祖天津麻呂神代ニ兵ヲ取テ天孫天降リ

給シ時御前ヲ奉ル仍其子孫諸之物部ヲ領而武勇之道ヲ掌

ト其後勇者ヲハ物ノト云ナラハ也 敵也 仇也 怨也

秋ノ野ニナメキタテル女郎花アケカニシ花モ一時 古今

蒼頡篇云 頡 紉反 俗云 象乃古度 形似瑟而短有十三絃柱高三寸也風俗

通曰神農造箏秦聲也或云蒙恬所造 橫笛律書樂圖云音

敵和名与古不得本出於羌也 漢張騫使西域首傳二曲 風俗通曰武帝時

女仲所造或黃帝時伶倫造之 雲井ヲ響カス徹天ノ樂心也

高麗人應神天皇廿八年高麗王遣使朝貢

寬平遺誠曰外蕃之人不可召見者在簾中見之不可直

對耳李環朕已告之慎之 案之如遺誠者蕃客直對

給問敷由ヲ雖被載宮中ニ召事ヲハ不被誠歟而今詞本文ニ

違テ歟若葉此外有例勅制歟如何情思之此文指召覽スルキ無故輒

不可召宮中云云心ヲ含ム歟作者料簡取意不依文歟

職負令曰云蕃客掌蕃客辭見

鴻臚館云蕃客察ニ有仍此察カハ鴻臚卿号ス云遠也蕃

謙饗 送迎及在京夷狄監當館舍事ヲ謂ニ鴻臚館也

鴻臚館云蕃客察ニ有仍此察カハ鴻臚卿号ス云遠也蕃

藩也遠藩ヨリ來朝之客ヲ撰ル所也古采於此所渤海客餞之
詩句多之漢朝鴻臚寺亦以此義也此館延曆遷都之始東西
大宮被置之而弘仁以東鴻臚館為東寺賜弘法大師
不空三藏鴻臚館大真善寺之例歟以西鴻臚館為西寺賜
或亦大師三藏之再來ト云旁有寄字守敏僧都其後七條朱雀鴻臚館ヲ立テ置三韓館舍於其中云
漢書曰鴻臚寺周禮大行人中大夫掌大賓之禮及太客之義
小行人下大夫掌郡國賓客之禮以接待四方之使者至秦
曰典客漢書百官表曰典客秦官掌諸侯餼義蠻夷秩中
二千石景帝更名曰大行人武帝改曰大鴻臚王莽曰典樂
胡廣漢官解譜云鴻臚傳也所以傳聲贊導九賓
元明天皇和銅五年十一月辛巳加左右辨史生各六
人通前十六員尚書者管轄之仁權衡之職也上象七
星七井也故也漢朝尚書郎親近之官也仍口含鷄舌香于
握蘭故云握蘭之職也

大夫辨

升てくまらるる

將井テ

三代實錄曰仁明天皇嘉祥二年渤海國入觀大使
王父雄望見光孝天皇在諸親王中并起之義謂所親
曰此公子有至貴之相其登天位必矣史記曰韋丞相賢
者魯人也以讀書術為吏至大鴻臚有相之當至也相
有男四人使相之至弟二子其名其成相工曰此子貴當封候
亦曰老父相呂后曰夫人天下貴人令相兩子見孝惠曰夫人
所以貴者此男魯元所皆貴大鏡勘文曰古老傳云
延喜御時異國相者參來天皇御宇廣中聞御聲云此人
為國主歟多上少下之聲也叶國躰云天皇恥給不出御次
先坊保平右大臣家列座依勅令相云弟一人先坊容貞
過國弟二人時平賢廬過國弟三人菅家才能過國各不
叶此國不可久歟貞信公為淺藪公卿遙離別候給相

者遼申云彼候人才能心操容貞叶國定久奉公歟者案
之古賢皆載此註頗有疑貽保明太子本名崇尊者延喜三年
誕生同四年二月十日立太子一歲同廿二年三月十日薨廿一歲
聖廟者昌泰四年二月廿五日遷遷太宰權帥給然前坊誕
生以前御遠行也列座之條頗以參差傳記之誤歟相者
參來條者實事歟或說云西宮左大臣行幸供奉給見
伴別當康平上云相人見テ容貞人ニ勝レ給ヘリ未タカレイニシキ
人シニズトホメ申ケルカ後シ見テ背ニ苦相アリソラクハ赴キ詣
所可給ト云リ 高麗人詞ニモ光源氏ヲ聊乱レ愁事ヤアラ
ムトイヘリ相似允歟 玄成西宮和漢蹤跡一同歟
才伎博士莊子伎藝事也非本才ニ云云
案之和語強不然唯才學之事也内教之亦ハアリ博士天平
二年始置文章博士漢書曰明於古今溫故知新謂之
博士聖德太子習内教於高麗僧惠慈學外典於博士

覺覺可可並並悉悉達達矣矣 職職負負令令曰曰博士壹人掌教授經業課
試試學生神龜五年七月廿日 勅置律學博士二人本同
三年二月四日格置紀博士承和元年三月八日格停紀
博士加文章博士一員一員
いとめをさるるをひけりひけりをひけりひけりをひけりひけり
和國相也
漂漂日本記日本記 洋洋々々 文選 澹海濱上同
直仁也 見伊セ物語真名本ニ
道道くくりりががええ 註曰言伎謂此七也
宿曜也廿八宿 九曜之行度ヲ以テ人之運命ヲ勘ル故也
弘仁五年

遂下明詔男女都屬世入初賜朝臣姓其各男皆用一字其
 爵女同叙從四位弘仁源氏本信小邊大臣弘廣階大納言常東三條右大臣
 寬四條大納言明橫川宰相母貞姬正四位下潔忠仁公室令姬尚侍母
 善姬母百亦氏弘仁五年五月八日賜源姓是源氏始也同善姬
 源氏本系上云嵯峨御後弘仁寬平元年十二月廿三日始定七代
 源氏年爵次第弘仁承和天安貞觀弘仁源氏隔二年預爵
 權大納言兼行右近衛大將民部卿中宮大夫菅原朝臣云云
 宣奉勅天曆六年正月初加 延喜御後代々源氏大臣外除之
 左大臣信 左大臣常 左大臣融 以上弘仁 右大臣多
 右大臣光 以上承和 右大臣能有天安 左大臣高明
 左大臣兼明 延喜 此外 貞觀 元慶 仁和 寬平
 源氏每大臣仍不入之

日本後記曰弘仁五年五月甲寅詔曰朕當揖讓篡天位德
 瞭述化謝覃遠徒歲序屢換男女稍衆未識子道暹為

人父辱累封邑空費府庫朕傷于懷思除親王之号賜
 朝臣之姓編為同籍從事於公出身之初一叙六位唯前
 号親王不可更改同母後產猶復一例其餘如可用者朕
 殊裁下夫賢愚共智顧育同思朕非慈絕廢體餘分
 折枝葉因以天地惟長皇遙與豈競唐樂於一朝忌彫
 斃於万代普告内外令知此意 乙卯云云 是曰公卿奏狀
 奉今月八日詔書備歲序屢換男女稍衆未識子道暹為
 人父辱累封邑空費府庫思除親王之号賜朝臣之姓編
 為同籍從吏於公出身之初一叙六位者階下則誓承基
 窮神聞他然猶垂領彫弊降除王号柳恩音長久斯誓
 計天下未有臣等見之矣唯我國家聖緒一統初無五運君
 臣之位自然各定若親王之号叙庶人人位詭封邑之費
 早枝葉之曹恐後世之有識謂前時之不穩狂言聖
 擇不敢不奏謹以申聞不計之

せんだいの宮治くらくらぐらぐら
此光帝相當光孝天皇歟

典侍詞ニモ三代之宮仕トアリ光孝宇多醍醐タルハキ歟

醍醐帝女御号兼香殿為子内親王仁和皇女也此例歟

ほのこころとまうりく 風也 尚書側見月也

母さうり 左傳曰帝嫡妃曰皇后帝母曰皇太后

右宮帝祖母曰太皇太后也

沙世とれ名部つれゑあひ 兄ヲモセウト云姉ヲモ妹ト云定事ニ此兵ヲ御宮モ藤壺之御兄ナリ

ふらばが 飛香舎也 藤懸蝦干木但上古非此木歟 建曆御記ニ

うけざりて 諾兼諾 受張歟 或説ニウケリ請給ル心歟

ハ雲抄曰ウルセクモノニサリタルト云躰ナリハカニト云心ニ枝衣ニモイヘリ譬ハウルセクモ同キ也

沙あふりさをもさあはぬぼくぬ 不遠也

ながりさし 昵近也

くさりかふさ思ひどらふさふさ 共万葉疏史記 厭外人白氏文集

かあしとわぼく 輕 日本記ニ無礼新撰 滑 宛字也

伊勢物語云イトナシト思ケレド心ガシハイヤニサリケリ

にげあふ 毎袂気也ニツカハシカウ又也 但是ハ每人

間也シドロクニジキヤウナル心也 隨テ所ニ心得ハシ愛憎心也 奥入ニ

い 右宮皇子延喜八年二月廿八日薨ス 好色と並双之義人也 式部卿是忠親王御後始賜源姓号

光源中納言 仁明天皇源 延喜元年 氏号西三條 任右大臣 日野系圖ト云物ニ

左大臣高明ヲ 光源氏ト書之

かやく日れをときとせり 中宮彰子 御堂女上東門院 十二歳ニテ入内也

ノニイラセ給シアリコソカ、マクサ藤壺ト世ノ人申ケレ

栄花物語ニ 皇女入内事 昌子内親王朱雀院御女也

ナニ 人生十二ノ一周ト云此歳

役ヲ勤歟但親王元服ニ大藏省祿ヲ儲事ニ無先規歟然
而是ハ准東宮御元服義歟詞ニモカキリアルニコトソハ
春宮之御元服南殿ニテアリニシトウサセ給ハストアリ
大藏省 周礼ニ地官吏部之屬歟本朝別置當省
不可異朝准扱者歟此省掌諸國租稅諸公事之時
成功下文令支配國々ト也
藏人所 嵯峨天皇御宇弘仁年中始置之摸異朝
侍中内侍等職歟彼侍中尤為重任内侍者宦者之任
也本朝弘仁以往少納言及侍從為近習宣傳之職而弘
仁初置當所以公卿弟為別當滋歟四位侍臣中撰其人為頭
職也亦為要籍駢仕六位中撰良家子令候殿上
謂之非藏人

きびハ 雅也 日本記ニ

うのりく〜びさう〜
受常也 万葉ニ

た大郎 孝徳天皇大化元年六月日始任左大臣 立端

〜こ〜 葵上母桐壺帝姉妹也仍御子腹ト云也 致仕

大臣ヲモ宮腹ノ中将ト云リ ウツホノ藤原君一世ノ

源氏ニテミメカタチ才能世ニ勝レタリ時太政大臣之獨娘ニ

御冠シ給ニ夜智取テ無限イタリテスニセ奉リ給也

沙〜 時宜ヨキ也 藤裏葉卷ニモ

御トキヨクサウトキ給テトアリ 横陳也 儂日在身 遊仙窟ニ

延喜十二年十月廿二日保明親王元服夜故左大臣時平

女恭俗謂副卧年 李部王記ニ寛和二年七月十八日

三條院親王御元服同日皇太子年工 法興院大相國女尚侍

樽子為副卧 見大鏡 光源氏通執政臣女事

九條右大臣之女初而ツカシテ 年ハ我身ニソヘテスキスレト 西宮左大臣

新古今 思心ユカズモ見カナ

さ

いよまうて

侍殿上車也

親王元服時下侍二備

休所例也殿上六間也神仙門東三間西三間也上戸有小部
主上殿ヲ御覽スル所也 倚子有覆奏杖和琴其其盤三
脚圍基磔其基高筒在家朱辛櫃火櫃在夏亦横敷之
前有有硯瓦硯春冬有有垂幕小板敷之面有有掉間小庭
時簡膳棚有亦近代横敷押角柱二二蘗芳網干召小舎人之
時藏人引之二二條院御時以後事也 建曆御記

おぼ

くまの

御酒日本記酒同 旧事本記云干時

吾田鹿茸津姫以下定田校名田以其田稻釀天甜酒
嘗之矣 本朝事記云天皇品院之代於吉野之白椅上
作横白而於其横紅釀大御酒獻大御酒之時擊口
鼓為皮或神酒請神之祭二皆酒ヲ供スル故也
神字ヲミトヨム也 酒ヲキトヨム也 亦云三季冬造
テ春熟シ夏領スル故二三季ト云也

文選ニモ冬釀接夏十旬ノ兼清ト云ト見ヘタリ 亦云
三寸酒ヲ飲者去風邪ヲ三寸仍号之キトヨム
亦云馬ノ長シモ四寸五寸ト云也亦万葉二十寸ト書之
寸ハキノヘ也 鶴寸ト書テタツキトヨム也 亦云三木杜康
造酒 蒙求ニ杜康カ妻男ノ外ハ行ケル間ニ夫ノ日々ノ
飯ヲ園木ノ三股ニソナヘシケルガ雨露ニ潤テ酒ト成也
コキヲ樹伯ニ祭此事吉野ノ白カチノ古事ニ相
似リ和漢之縁起一同也

お

いし

内侍宣旨藏人奉勅宣下也

宮記侍中者内侍也見後金日磾傳 不付大政官付藏人
養進ハ内奏ト云也陽支命子 宇麻志摩治命孫
大臣也 日本記ニ 旧事本記云 出雲ノ醜大臣
命輕地間岐宮御宇為大臣奉ト齊大神其木
臣之号始起此時也

お

いし

大臣也 日本記ニ 旧事本記云 出雲ノ醜大臣

ねまゝのりひりこころかこ

獻物也或籠物

葉蓋西宮記云木物枝物共菓子也籠ヲ組テ薄様ヲ敷テ五菓ヲ入テ木枝檜松大臣以下取之後ニハ膳部ニ給テ被調也元服之時之人之捧先物也掌中曆曰五菓ハ柑橘栗柳梨等也

こぼきりくつひつ

屯食也飽飯ト云物也祿

幸櫃也内藏寮祿也春宮御元服ニ在之親王元服ニ毎之但是七結構之義歟屯食也延長七年二月十六日當代源氏二人元服垂母屋壁代撤書御座其所立椅子為御座孫庇弟二間有引入左大臣座其南之第一間置圓座二枚為冠者座置面々亦同座前ニ亦置圓座先兩大臣被召著同座引入訖還著本座次冠者二人立座退下於待所改衣裝此間兩大臣給祿於庭前并舞不著香出仙華門退出於射場著香撤祿

次冠者二人入仙華門於庭中并舞退出於仁和寺故參先足震儀御待所椅子親王左右大臣以下近衛等同候有盃酒御遊兩源氏候此座候四位親王之次深更大臣以下給祿兩源氏宅各調屯食二十具令分諸陣所々々

天慶三年親王元服日屯食事内藏寮十具穀倉院十具以上檢按大臣御之調衛門府五具御調之左馬寮五具御調之列立南殿版位東其東春與殿西立幸櫃十合件等勾當其事仰檢非遣使令給弁官三太政官二左右近衛三左右兵衛二左右衛門二藏所二内記所一藥殿一晝所一内豎所一校書所一作物所一内侍所四或采女一内教坊一系所一連殿一

女

源氏十二歳葵上十六歳也

にげり

ニワカハシカラ又心也 毎似気也先ニニケナク
スト云所ニ心遊々也 奥入ニ

こころ

所モセキアハ又也 譬ハ廣ク大成心也

ふれ

藏人少将事也 光孝天皇仁和四年十一月始神之干時
正五位下左近少将源湛正五位下左近少将藤原敏行也

執政臣息補例

清慎公

寶頼貞信公一男母延喜十九年正月廿八日任左

近衛權少将

延長四年正月七日叙正五位下二月廿五日

補藏人廿七

諫徳公伊尹右大臣師輔一男

天曆二年正月廿日任左近少将去七日叙從五位上二月

十九日補藏人此内清慎公例相叶欽父貞信公于時

左大臣母宇多院皇女醍醐御宇五位藏人等也

くら

奥入ニ巨々等也 亦多々等也 日本記ニヲホクト云心也

秋ノ夜ノ月カモ君ハ云カク
コハシモミ子ハコラフコシキ

おろ

勞也亦煩也カシハク心也

もろ

泚景舎也 桐壺舎ハ殿之次也

庶人家ニモ寢殿雜舎ト云カトシ大内之五壺ハ仙家

五處ニ象也 西王母家有 或亦壺中之義也 虞摸韻云

壺臺也 桐ノ近年不見但荒 建曆御記

こころのふもくすり 二條院事也 李修理内匠察

にがり 無二也

池乃心ひりう志かし

樓額顯鷄鵲 池心浴鳳凰

白氏文集 苔生石面輕衣短 荷出池心小蓋疎 物部安與

散又丘カケヲヤトシ藤ノ花 躬恒

河海抄卷第二

第二 篁木

正六位上物語博士源惟良撰

篁木心ヲシラテソノ原ノ

道ニアヤクニトヒヌルカナ

光源氏のかのこころごとく〜いひつゝを法を分むるなり

光源氏ト云名ハコトコトシク聞レト振舞ニツケテ云ケタルトガヨホ

シト也名ノニコトコトシクトヨミ切テ云ケタレ給以下ヲハフルヒノイ

ト心エヘキ也ヒトツニヨミツ、ケテハ可達其心

すゝことごとくを 逸 日本記 文士多数奇 白氏文集

人れあひいさづからま 古今 爰ニシモ名ニ白ラニ女即花

まめづら 篁遊仙窟 皺眉上旨 真立

ニコトミ立タレナリ

かよひうまかり〜ことハかくて 麗也 心柔ニ弱キ様

成心歎賢木卷ニ朱雀院ヲ御心ナヨヒタル方ソキテトアリ

〜乃、かぬま〜い〜い〜い〜い〜い 一説ニ云業平朝臣

七夕ツメニ宿カラント 詠スル時 実野ニ一宿ス仍有此名歎云

亦莫明中将ヲ号交野ノ中将之云亦交野ノ少将ト云古キ
有物語好色ノ人ト見タリ所詮彼交野ノ少将ハナヨヒスキ
實少キ好色成故ニ光源氏ノニメタチタルヲカヘリテワラヒヤセ
ムスラントイエル也或説ニ交野ノ勝姓ト云者有集利ト云
何モ不足信用

志乃ぶの...
なぐあ...
中イ本入

春日野ノワカムラサキノスリ衣
霖也 介雅曰 三日以上ヲ曰霖
物忌事 夫以ハ迦毘羅衛國。

在世界名胡其國
イニ世七字ナシ

在世界名胡其國中者桃林東西南北卅六町也其中有桃
木高三十丈也着枝方々各三十五丈也其上平也譬如鏡
面其下有一大鬼王号曰物忌其鬼王边他鬼神等寄託中
大通鬼王候百里之内奏聞於事由小通鬼王跪千里之外
被令奏聞於事由大鬼神王爰大鬼神王誓願言眾生之
中若有病苦疫疫之難者令早差若有短命者延其命

若有毒病者與其福若有可墮地獄者拔苦難有未證果
者令證果如此有利益六趣々有之有情持實吾名号者若
人宅物恠屢現惡夢頻示可家諸凶宥之時臨其日書吾名立
門其改他鬼神不令來入但書時讀咒書之時尋得於陰陽
靈驗之師書吾名令持人々如影可令守護内裏御物忌之時
參籠之人ハ從丑時參候仕也御物忌ニ御字ヲ不書柳枝ヲ
三寸計ニ作筒ニ御冠纓ニ被指也或亦九御袖ニ白紙ニ書テ
被付亦御殿之御簾每但二間ニ不付之也亦昔忍草ニ物忌
ヲ書テ御簾ニモ付冠ニモ指シタル也且ハ忍草之一名コトナシ草
ト云ニ付テ用之無事之由也後撰貫之哥ニ
冠ニ差故也云 此忍草ハ裏ノ白クテ短キ草也軒端トトニ常ニ生草
也云

宮心

頭中将也

引ハ左大臣男
母桐壺帝姉妹

清慎公

左大臣忠平公男母宇多院皇女此公
慰藏人少将并頭中将事一同也

嵯峨天皇大同五年二月

始_下置殿上并藏人頭從四位上左衛門督巨勢野之從四位下

中務大輔藤原冬嗣二人補之執政臣補藏人頭例
忠仁公 天長十年二月補藏人同十一月十八日叙
從四位下將中將元從五位下元從五位下 清慎公 延長八年九月廿三日補
左近中將 元從四位下 照宣公 天安二年十月補
貞觀五年十月將中 謙德公 天曆九年八月十七日補
元從四位下元從四位下

志_下ほ_下い_下ひ_下

漸々 源順和名ニ長治天下 匡房卿說 番長 實親說 治也

優也 十住論云是停弱法若無有大心是大夫志幹之言也

日本記云成務天皇四年甲戌二月始定諸國境各分得邑詔

曰自今以後國郡立長縣邑置酒即當國幹了者任國郡首

長是為中區之番屏々亦云幹了者國長也 伊勢物語云

二タワケケレハ文ハサヲサシカラス言葉モ云シラス

躬恒假名序云アルシノヲサヲサシケレハヲカシク 任剛夕り 志峯

長哥ニトノモル身ノミカキモリヲササシクモヲモホエス此詞日本

記ニモ色々ニ書リ亦伊勢物語大和物語十トニモ多在之前ニ

隨テ可成區欽大畧ハ凡漸テト云様之詞也難一変者欽

清補朝臣與義抄ニモヲサヲサハナヲスグカナリト云欽

源氏物語ハ粗テト云心也亦ヤヤ欽ト云ヘリ云ヲサヲサシクハ各

別之義也此物語ニモ寂ワカヲモヲサヲサシクシテニタニハヲハトアリ

但ヲサヲサシハ長々シキヲサヲサトハ辭可替欽

思トテイトシモ人ニムウレケニ

むつ_下き_下こ_下こ_下え_下た_下ま_下ふ

く_下こ_下あ_下る_下べ_下こ_下し_下こ_下ろ

を_下り_下い_下ど_下い

頑也斤輪也

各競日本記ニ或各自忍也ハ雲抄ワレ

人丸 拾捕相 拾捕相

春ハ梅秋ハ竹籬ノ菊ノ花

ヲノカシシコソコシカリケシ

心ニ任テ云心欽

えん_下ぶ_下れ_下い

ね_下ほ_下ぞ_下う_下め_下る_下御_下厨_下子_下ニ_下の_下ま_下ら

怨也ウラムル也

次ノ町ト云也 大惣 大都

ワレアル心也云 各寺師人死スラシイモニラヒ

秋風ノ四方ノ山ヨリヲノカシシ 日毎ニヤセヌ人ニスラレス

吹ニナリヌルモミナカナシナ 母貞之 春ハ梅秋ハ竹籬ノ菊ノ花

惠心僧都作極樂六時讚云 近モ遠モ各カシシカハ以下六時讚ノ詞ニラス

心ニ任テ云心欽

心あそく

八雲抄云ヨシハカリ也

心アテニヨラハヤヨラニ初霜ノ
ヲキニトハセルシラキクノ花

うこにこら

足下

秦始台本記曰足下驕恣註

曰蔡邕ネウカ曰郡臣士庶相共言曰殿下階下足下侍者執事
皆謙類也

こまかいしとめんつくまじき

シハヤスメ字也是

ハトイへル也下ニ非

くしつがさ

草書之躰也真ノ字ハ人之衣冠タ

ニキ躰草書ハ人之走姿行ノ字ハ人之歩ク様ナトイヘリ此卷奥モ
ハトリカキカイヒクツニヲナナトアリ
ウルハミカラヌウハハカリノワサ也

あがめてむいさこさこりあるまど乃うらわ加ほど

隨分也其人之分ニ隨而宜キ也

あがめてむいさこさこりあるまど乃うらわ加ほど

ソレモナリ

コイサキ
小火

草ノ生長ニ未タ
嫁母ヲ壁言タル也

苗日楊家有女初長成 美良在深窓人未

識

長根哥ニ

うらわほほど

斤才也 日本記ニ 斤廉也

うらわほほど

穩令序此字訓ヲタマヒ就其

其心也

ままび

ナヲザリト也キスサニ同事也

むとろつてつげて

由付也 ヌヘアリテ也

あひくくもむ

下也 或説腐欽云

あひくくもむ

至テ能ト悪トハ難キ

省物也 去ハ中ノ品ニ人之心ハ
見ユヘキト云ナリ

お祈ひよそのけをひ

と氣イ日本記ニ 形勢 新核示記ニ
景気也

くろ外こどくんとて

早也 選叙令

あをんれんぶらめらどまてお乃がりくる

直人 諸大夫也

中院事書云

ナヲナラシキ
同心欽云

伊勢物語云久ハ

直人ニテ母ニ藤原成ケル

けらめ

結目也 掲目也 訓ニイナシル也

せうろるたつさ

便万葉ニ 露鶴寸上向

あくつらひ

カケシヨフナリ

かりれーなれけしーあゝぬ

不下習 下計シクアラヌ也

或不恠也 ケシカラヌハアラヌ ヲトロクニシキ様心也

隨所可得意百數兩端詞也

なまましく乃うんづあめ

生君達ナト云躰也或云ナシニシク云

むらゐの位五位

非糸議 前官事也 散位也

ももしれゆぎし

根本之種姓也

ヲキツセニ子サシト、ナヌ浮草ノ 没タルコトモワレハスルナリ

くまろくあや

ナニカスキヨキ心也サハヤカナト云同心也人ノ

ミヅミヨモクシタルヲハシナリタルト云ニ對シテ可得心 鈴虫卷ニ御乳

ハイトカハカナルヲ心ヲヤリテナクサト有給トカハキタレ心ナリ

いさかめるまに

無也

いぶくすまをせさもを

不放埒也 一ハニキハカカハニキナト

云躰也

うさろくしき女

贍也

和名ニモ 新後承記ニ

亦富饒

タカキヤニノホリテニシハケフリ立 タミノカトハニキイニケリ

仁徳

こと人のいんやうはゆえむむあせらうくと

コト人トハ色好

ミナラヌ人ノ云ニ様ニト頭中將ノ源氏ヲ云也ニギハ、シキニヨルニア

ラ子氏女ノサノニヨチフレヌルハヨカラヌト云也

むくられゆど

八重葎ニテ門サセリテシノ哥ノ心歎

かろりりゆりゆ衣

ヤハカナル也

汗わがげ

火敷也

日本記ニ豊玉姫之鶏羽草不合尊

産給ニ時父彦火々出見尊火燭テ御覧見梟利ト云 亦側

影ホノカナルカゲ也

つゝいりまたをけし後わらうとふかびとて

上以風下々以

風刺上詩 上含淳徳以遇其下々懐志以事其上 史記ニ上之

仁猶風靡草

せむさあれ申乃あるトとすべさ人

適毛詩ニ 國治思先治其家欲治家先治其身云心也詩序ニ

以一家之事懸一國事ハズル左傳曰詩曰刑寡妻至兄弟以御干家邦註曰詩大雅也言文王之教自近及遠也寡妻嫡妻謂大好也

古今ソニトテトスレハカリカクスレハアナイヒシラスアフサキルサニ

八雲抄云アフサキルサハトスルモカリスレモ也云云

あまめやり 貞也

かろう女むすめあつむをこゝろ入あつむ

十二カニガト云心也

こととえり 言撰也 フトハラエラヒテカリ也

をべりく 正与僮無無便 無為 古今長アハシト歎アヘリセニスナニ庭ニシテ立ヤスヘハ

アフリニキリ立渡アケヌ氏 君ヲハヤラシニテハスヘシ

すもつきほのり 薄墨生成歎 一説云ウスリコキ歎云

ことりかりぬるれめなるまどろ人の 殊中也 異中

日本記アテヌカ 或綺中 紫明抄ニ

みまろころりひささかさつとらし 無羨相也亦 伊勢物語 伊勢物語

無貪相也 主人妻 遊仙窟ニ 家童 眞名本ニ

云昔男右梟利宮仕イワカシウ心モメナサラサリケル程ニ家童ニナニ思ヒト云人ニヨツキテ人ノ國ヘイニケリ

かみなささくろみ 泪ノサシイワル心也哥ニモサシクモハ泪成ケリ

トアリ泪クニ同事也サシクニ袖ヲラシケルノ哥ニ聊可替其レハ頃テナト云心也八雲抄ニサシアタリト云心ナリトアリ

あつりぬ 淡如氷 莊子ニ 淡シキ也 君子之文也

ひ水也ふるにこめさ コナキハ勝美詞也云 水原抄ニ 或亦キ也云

一説ニ古ナキ歎フルナカシキ心歎亦云小ナキ歎ヲナクカケル成歎

あことまめこと 眞事也 側也 ソハツキサレトイハル同心也

くほかす物しひも 曲也 日本記ニ 隈熊 阿間也 思テ人ノ心クニモニ

あふりにしめる秘も

蓮葉ノ濁ニシニ又心モテ 遍照

又とく金しつらん

ニスヘラカシタル也 空蟬卷ニ又キスヘシ

タレ衣トアルモ又キスヘラカシタルナリ

よとてか

便也 万葉ニシカノ山イタチキリワラシカヨスカノ山ト見ツシム

孫姫式 ヲヒニルメキニシニフケヨリテワニウテニチ又ヨスル十三ナリ

はぶら身れうらるらめし

觀身岸額離根草論命

江頭不繫舟 古人尺一同此詩ヲ載リ然而其心与物語相違

仕也詩者以是無常ニ譬タリ 物語ハ浮跡之心也 又選ニ在没乎

若不繫之舟一貫誼鵬鳥賦曰野鳥入室主人將去請問于鵬余

去何之此心也予以管見勘後之潜通作者之意趣努々自愛云

うかづく

點頭也 或領狀 同漢書ニ

領評

遊仙窟

顏評 淮南子ニ

むまのこ物ささめのとせう来てむらわたり

物定博士

此名目先例未勅也 亦假令物合判者同也

輕糺

日本記ニ

京極北政所

鵜子

自筆本ニヒイライタリトアリ 然ハ如此可読歎一説云

鴨ノウスヲカニウレ時ツコリテ羽ツタ、クカタチ也云云亦云、

ウキ井タリトアル本モアリ 同心也共ニ鴨ノ囀姿也云云輕糺ハカニ

カニシキ姿也歎万葉長哥ニ真毘之毘之余シトアルハ人ノヒラメキテ

アウコリ井タレ義也トイハリ同事歎云云

木のささめはらこ

良匠如制木

帝範

そはづもささめはらこ

側付也

ツハニユカニ

宿

日本記ニ

宿老上同

宿雨同 宿雪皆同心也

案之

左礼ハ 左道義也

人之サレタレトニトシカラサレ也 俊頼口傳ニ誹諧哥ヲサレ哥ト

云リ其モ歳元様也サレトナヒタレトハ 以前ノ宿老ノ字歎

是モ年老テ物馴スキヨカラ又躰也 新猿樂記ニ虚左礼

トアリ左礼右礼之義也ハニハ上ニ付タレ詞也

うらるらささめはらこ

美麗調度也

よをわすめあひつらしとをりたふまは是一つやハ忍ううさふし

キヲ折テヘニケニ年ヲカコフコハ拾ト云ワヨツハニケリ 伊勢物語ニ請君屈指ナチ指數ヨ 白文集ニ

アムンじりまらりののてうぐく 臨時祭調樂

十月午日有儀式北陣構帷屋有饗良膳勸不並等也

みぞきふぬぬ 霽也 雨雪 文下也

こまのれまらあがるこころ 班也 永記 分散 湏別 八雲抄云アチコチ行ナリ

かまらんこころまらうらうら 念也 未ナカリケル也 兩説

かまらんこころまらうらうら 或説亦ナカリケル也 媚心也 伊勢物語 真名本ニ 世俗ニ瓜クフ

ト云ハユカミタル鮓也

火のうらぐらふまらうら 耿々 殘燈背壁影 白氏文集ニ

ひさあつくさおのうら 批帳帷也 正身百葉ニ正負之事也

さうどし 消息也 アルカケ日本記ニ

せうそし 直隱也 或奄也 宅也

ウキニヨリヒタヤコモリト思ヘ凡アフミノウミハ打出テモニヨ

そし 一説ニ理不盡成様 和泉或部哥也

い 尋ニトリスニモケシカラスモカクレ恐ラスニテ終ニハイカクレタルト云也 引ヨセハ唯ニハヨラテ春駒ノ

ほ ウナ引スルノ名ハ立トキク 眞入ニ伊行

叙也 此哥心不叶 綱引ト 嫉妬之心也 秘説有之

た タアリ又ヤト心ニカテアラヒニチハ

立田姫 タハフレニクキニテソコニシキ

龍田姫ハ 深成事也 七タハ 裁縫心歎 後ニ 見ツト 秋ニモ 成カ 龍田姫

案之春ハ 佐保山神ヨリ 事起テ 佐保山ノ 霞ノ 哥ニヨセテ 春ヲ

深神ト云 秋ヲハ 立田山ノ 神ヨリ コトヲ コリテ 紅葉ヲ 詠ル 故ニ

秋ヲ 深ル 神ト云也 亦ハ 神名也 但 春ノ 立田姫之 哥在 万葉

櫻哥ニ 若雪ハナヌカハスキニ立田姫 秋之 棹姫ハ 不見歎

夢此花ヲ風ニケラヌナ

タチ又フワサハヌスツアリケル

逢事ハセタツメニヲナシクテ

タチ又フワサハヌスツアリケル

逢事ハセタツメニヲナシクテ

タチ又フワサハヌスツアリケル

逢事ハセタツメニヲナシクテ

うねせく ウレハシク也

はむれとく 絶望 光 榮 無見 日本記

つるめし 無事也 殊事ナキコシ歎

まらぬ 過去事也 コヤ君カテヲワカレヘキ時トヨリトク也

あらく 屢也 論語註曰屢者數也 數ヲ重ル心也 多度也

大細 此大納言何人哉 若左馬次ノ父歎

いけ 古今ニ吹風ニアツクハツクルモノナラハ 一本ハヨキヨトイハニシ

池 池ニ月ノ見ハケルヲヨシ 拾 雲井ニテアタラハ又月々ニモ我宿スキテ行時ナシ 伊勢

ふ 法進曰笛漢武帝之時丘仲所造長

一尺四寸 今時所吹笛者唯有七孔 風俗通曰笛武帝時

丘仲所造 或黃帝時伶倫造之云云 悉曰雲藏詠文曰笛

七孔 長一尺四寸 亦曰笛 蕩滌邪穢 納之雅正

第三元造 曆云伶倫笛ト云リ 此乃取 嶺 谷 竹 字 鳳

凰鳴者 也笛有十二孔也 二孔闕而不傳其九孔者以出

五音 翰曰笛本四孔少商聲 京房字君明復加三孔 下為

商音 故云後出 蕩滌邪穢 則五音畢備也

かけ マトリモスニト云ニ 飛鳥井マトリハスニカケモヨシ

和琴 和琴ニ能鳴調アリソニソハテイハル也

和琴者 伊勢諸伊冊尊御時令作出給云云 仍諸樂器之

最上 置之也 アツマゴトモアツマヒ云也 鴨長明記云和琴元ハ弓六張

也 彼國古註文云 弓六張 神糸料

め 感情也 メテタニラニ心 日本記ニ

庭 庭下也

古今 秋ハキ又紅葉ハ宿ニアリシキ又 姫子タニス 勵テニス 一説ニ不妬説

大 定家御本ニ

月 宿カク

宿 カク

宿 カク

宿 カク

キクモユナラ又云親行本八月トアリ

あがれつゝもバ 鉦 魚論語 解也 アサレハサレ同事ナリ

アノ文ハサケ物也

さしれあををん 箏 風俗通曰秦聲

也涼州箏形如瑟不知誰改或曰蒙恬所造五絃箏聲

并奏多善箏者故曰秦箏一叙名箏施絃高箏一然

或物云漢恭帝使素女鼓五十絃琴聲悲帝禁不得破

瑟為二十五絃一丈三尺秦始皇之時破尤五絃為十三絃

今箏是也昔以竹造之其後以桐造之

あがれつゝもバ 箏 折テミハナチリシ又ハキ秋萩 上向イツクニカマトリハトシアサヒコノ

あがれつゝもバ 箏 折テミハナチリシ又ハキ秋萩 上向イツクニカマトリハトシアサヒコノ

あがれつゝもバ 箏 折テミハナチリシ又ハキ秋萩 上向イツクニカマトリハトシアサヒコノ

山兎 止觀ニ 山勝也山下也下人也 屈兎 柳キホ 山カツノカキホニハル青ツツラ

ひしのもよさつらつら 競也 アウツク也

やましあぞ 牛麥 万葉ニ 前ニ哀ハカケヨ梅子ノ露ト云シハ玉鬘ノ君ノ妻也

其ツハサシシキテ妹ト我又ルノ心ヲ云也

古今ニ 我ノミヤ哀ト思シ蟻蟬 亦支テニ 塵ヲタニスヘシトノ思サキヨリ

和哥序ニ 鍾愛抽象草故号梅子 艶色 壯衣ニ十草ニ

故曰常夏ト 家経

お神 神もあつゝもバ 後ニヒコホシノ希ニ逢夜ノ常夏ハ

さしれあををん 伶偶也 亦龍鐘也 流離也 日本記ニ

やくあさのつゝもバ 無益之片思也 アハヒノカインノカタオモヒシテ

人やりあをぬむ 人マリワレカラナ

心也 人ヤリノ道ナラフナクニ大方ハ 後選 身ノ憂ヲミレハハシタニ成又ハミ
涙ニシ思ノ消ル物ナラハ イキウシト云テイサ帰ナシ 千思千腹熱 思ハム子ノユカレノニスル 一念一心焦 遊仙窟

焦心焦身 大集經ニ 三教指帰云一卷寧 モ術波加胸
紀尙名作一寸如焦之心 胸中火消二年不乾之泪衫上
雨收 本朝文粹六卷

かん 種也クサワロセ

吉釋天女端嚴之天女也然共佛眷属成之法氣付テワツ

ウハシト云也クスシカラハワツラハシカラナリ

富家女控其夫也貧家女孝於姑云也 我ハ貧家也ト名乗ル

天下益心聲 悦耳即為娛 人間益心色 悦目即為妹

顔色非相遠 貧富則有殊 貧為時所棄 富為時所趨

紅樓富家女 金縷繡羅襦 見人不欲字 嬌癡二八初

母兄未閑口 己嫁不須更 緑窓貧家女 并莫二十餘
荊釵不直錢 衣上無真珠 幾回人欲嫁 臨日又踟躕
主人會良媒 置酒滿玉壺 四座且勿飲 聽我歌兩途
富家女易嫁 嫁早輕其夫 貧家女難嫁 嫁晚孝於姑
聞君欲娶婦 娶婦意何如 白氏文集 秦中吟二

いへ 宜也

いさ 毎月也

風病 草茶

延喜式云八十種草藥北四種草茶中北蒜是極熱之

草藥也亦食茶ヲ雜茶ト云

いらい 雜事等也 雄丹 伊勢物語 前中書王

載鬼一車何足畏 棹巫三峡未為危

い 蠢也 貧也 白氏文集ニ

伊勢物語ニ彼夫望遠手シホテシノ目ツルルムクツケキ
人ノ口口口トハツテフモニアアラン

あぢらみくみんて 談悪也

あぢらみくみんて 談悪也

論語曰 知者言未必盡 大辯如衲 老子經ニ

三史 彼漢書 後漢書

伊行叙ニ三史五經三道ト書テ

而三道紀傳明經明法ト叙シテ

又月記云... 何れあやうそふとづられ
心をもいひて

五日節

金谷園記曰昔楚人屈原字靈均為三閭大夫被讒出而

隱江畔遂投汨羅水而以死即五月五日是其死日也後有
長沙人歐曲從岸屈原在其間謂曰我今受飢餓君留惠
相濟否回曰何物原曰要竹筒盛食糝葉塞頭不然即以莢
葉裹之五色絲以縛之投水祭我々則得食也不然即被蛟龍
奪人人祭令我皆不得食也回依言祭之饗食見而謝之今人
象之以為竹筒糝及蘆葉裹木俗作粽及艾葉糝并色絲
繫之 聖武天皇天平十九年五月天皇御南苑觀騎射
走馬此日詔曰昔者五日節常用菖蒲為纒比來已停
此事從今而後非菖蒲纒勿入宮中 續日本記十七

九日宴

月令重陽曰菊有黃華 天數九 秋數九仍曰 續齊諧記曰
桓景家九月九日當大災可盡家宜去費長房云登高采
萸 黃梓頭折菊花浮酒將攘此災桓景暮而歸家內雞犬牛
馬皆死房聞之曰汝每災 平城天皇四年九月九日幸神

泉苑兼命文人賦詩賜物有差 寬平遺誡曰五月五日
九月九日文人武士行事繁多不可忘不可援菊之露
菊之露トクヲキ出テイサツランヌレハッテノカユソ白クマ

君ハ人ハヒトウレハシクモ

藤壺之事

かみこ 中神也 或長神也 兩說欽 天一神也 金櫃經曰

天一立中央為十二將定吉凶云云立中央故号中神欽
件方古今所遠來也見尚書曆陰陽雜書安家說 或曰初日夜有方違者次々夜不忌初
日夜無方違者次々夜件塞方不可宿云云 家榮抄 亦永久
四年十二月二日縫殿以家榮依法性寺殿命令註進云天一
方俗謂之長神 己酉日在艮六箇日蛇 乙卯日在震卯
五箇日 庚申日在巽六箇日馬 丙寅日在離午五箇日雞辛
未日在坤六箇日鹿 丁丑日在兌酉五箇日馬 壬午日在乾
六箇日龍 戊子日在坎子五箇日龜 自癸巳至戊申
十六日在天上 佛

まめ人

展季也 亦真也

あかうま

ナリタカシマナリタカシ大宮迎テナリ

タカシアハレナリタカシ一段シトナセソマシトナセソ二段 アナカニ
コムトモヤミツカナレ三段 風俗ニ鳴高也

二條院

陽成院ヲ号ニ條院云云 脱履之後御此院二條
以北大炊御門以南油小路以東西洞院以西也 京都之名

説ナト準抑ナキ一ノ事ニ無也

かみ川

今京極川也

現認部

榮花物語云中川

邊ニ御堂ヲ立法成寺棟北茂等也 旧記曰京極川二條以北ヲ
号中川云云 東川 加茂川 西川 桂中川 京極川

さうしれいはいこたまふり

賢也ケニト云心也

しどろ

退也

かめけたり

滑也 無礼心也

さうま

清宜也

史記曰衛殊

封布茲 註曰徐廣曰茲者^{ツシハ}蓀席之名 席日本記
御座同 筵也

あゝいもさうかもいしこわさぶれいりぐあつとく

風俗玉垂哥件礮在相模國^{タタミカメヲナカニスヘテ}

^{サカナモトメニコユルキ礮ニワカメカリアケニ}

あゝぬのをさあひりくくしし 喧響 日本記ニ

けいんしこふわさり ^{夏モス、シニハリヒトヘヲカサヌ也仍有音歎云云} 日本記ニ

むつりり ^{勸當 世継ニニコカトムワカリヲハシニシテアリ}

うらさくわさ ^{耳言也 万葉ニ}

式ヲつらふれ^{是ヨリシテアサカホノ宮ト號スル也} 斎院ノ一也

くはろぶがま〜〜く ^{方曲也}

輕々敷ク四度計ナキ由歎 ツマヤ

カナルトハ極信之躰也其ニ對スル詞ナリ 紫明抄云アラハ
ナルナリト云云

あゝいもさうかもいしこわさぶれいりぐあつとく

あゝいもさうかもいしこわさぶれいりぐあつとく

あゝいもさうかもいしこわさぶれいりぐあつとく

あゝいもさうかもいしこわさぶれいりぐあつとく

あゝいもさうかもいしこわさぶれいりぐあつとく

あゝいもさうかもいしこわさぶれいりぐあつとく

あゝいもさうかもいしこわさぶれいりぐあつとく

イカ成シ時吳竹ノ一夜タニ徒伏ヲクニシト云フ

もれけり

物兼也

つらつらと

枯音也

いそいそと

姉ヲモ妹ト云也

いそいそと

心トメテナクキカレケリ

まんな

丸也 勳付 夕顔

あまのこ

湯也

さうやう

細々許也 遊仙窟ニ 少々 杖小蠅 心ツレモチイキ

あまのこ

ワキ、ノ人也 次ノ字ヲナミトヨムナリ 月次等ニ

いそいそと

無動也 ウキキモナキ一也

あまのこ

取出給也

あまのこ

下也

あまのこ

押立也

あまのこ

初事也

あまのこ

淡也 ヲハメニクム心人 亦阻アム

あまた

山城ノ風ノヤムサニシトメヲソ ナコ竹ノヨ長キ上ニ初霜ノ

あまた

ナコ竹ノ大テウ竹ヨリモヨ長クテタハミタラヤカナルニテ然レモノナリト云々

あまた

溺也 ソナヲホレノ心也

あまた

トリカスモラニモナヤ中ヲ有ニカフクワカ身トオモヒ

あまた

若狭成後世山ノ後ニ又アヒカナラス今日ナラス也 万葉ニ

あまた

ソラニ思トテ我宿ニキトナカケスニキカクニ 古今ニ

あまた

打ハテ也

あまた

數鳴也

あまた

周章也

あまた

事也 ロサトカニシキ心也

あまた

逢坂ノ名ヲ頼ミツヨガ長ク九開ノツラクモ在カナ

あまた

ヒコホニニコヒハナリ又天ノ川ヘタツルセキヲ今ハヤメテヨ

あまた

楚々起也 勳文ニ 今案ニ

あまた

戦ノ字ヲソメク氏ソヨク氏ヨメリノキアケテハソメキアケテ也

をれたるいみてひつぎはく

継母間事也

請君撥蜂君莫撥變君父子成豺狼白氏文集吐外和漢例多之

あてんとみんふり 妙人也 高貴人也 伊世物語真名本ニ

大方ノ秋ヲ悲トスルコトモアテ成人ハシラスリ有ケル千里

面隠也

沙少こおもくくしみひんぎり

コヒニサヲ何ニツケテカナクサニ
夢ニモニエヌタル夜ナケレハ

ついなうしあつげハ

追従也

あこいさうし

吾子 日本記

我子アハ五音ノ相通也

あつくりあふ

下手ニキ心歎

わらみくしけとあ

面目也

ナト裁縫所也

御匣殿別當也内藏察外御服

人さげぞ

順徳院御抄ニ

庶人モ装束調スル人イフ

不遠也

不遠也

うれたぐ

喜愛也

むいんよんつさかくて

無心也

ほろりり

不用也モチヒサレヨシ申セト云也
ソノ原ヤ伏屋ニ生ル筈木ノ

平定文家身合

平定文家身合

アリトハミエテアワヌキニヤナ

是則 筈木事ヲ先達色々ニ叙セリ

但大都ハ同事歟

能因牙枕云筈木ニスル木ノ栞中ニ有ガ下ノ茂リテ遠ノ見レハ

ニユカ近ク寄テミレハミエヌヲ云也 顕昭云信濃國ソノハフ伏屋ト

云所ニ有栞其杜ニ余所ニテミレハ竹筈ニ似タル木ノ末ノ有ヲ立

寄テミレハ其木モミエヌトナシ申傳リ筈木トハ庭拂フ木筈

也 家成郷哥合ニ 為忠哥 基俊判詞ニ昔風土記ト申文

見侍ニソリ此筈木ノ由大畧見侍シカ去其年久罷成ハカバカシ

モ覚侍ス件木ハ美濃信濃兩國之境ソノハフ伏屋ト云所ニ有木也

遠ク見ハ筈木立置ク様ニテ近ク見レハ其ニ似タル木モナシ然レ

トハ見ト逢ヌ物ニ喻ヘ侍云 一説云杜木ノ中ニ竹筈木一本雜シ

リト云云 兼曆哥合 竹帚木ノ捐ヤイツコヲホツカナシテ曾ノ原
ハ紅葉シニケリ 此心也經信卿記云此哥本入權辨伯耆木哥
不快事也者以書改不快難不知所應而後賴以此哥入金葉集
綺語抄云竹帚木三ツノ有論一ニ竹帚木ノ有森ノ有也其杜最茂
テ杜ノ中ニ竹帚木生タル也其ヲ遠ニテ見レハ有様ニテ森ノ下ニ行テ見
レハ木ノミケリテミエヌ也一ニ竹帚木ニ似タル木ノ其本ニ有也其遠ニ見
ニハ有様ニテ近寄テ見ハ失ル也去ハ如此讀リ是ハ最アサミアリ
カタクナシ非也無名抄云此哥ノ心慥ニ書タル物ナシ信濃國ニ曾原伏
屋ト云所有一其二本以ノ有ヲ余所ニテミレハ庭拂竹帚ニ似タル木ノ捐ニ
ミユルカ近寄テ見レハ失テミナトキハ木ニテナシニユルト云傳ルヲ此比
見タル人ニ尋ハサルキモ三ヘストリ申也昔コソハサヤウニミエケメ頃ハ
竹帚木ト見ユル木ノミエハコソ近寄テモカクレメト申也此事或説ニ
ハ彼本林ニハ竹帚木ニ似タル木有余所ニテ竹帚木カトミシカ近寄
テミレハアヲヌ木也凡云リ或亦竹帚木ハ在ノ捐ノ最頂ニ有

物也其ヲ森ノ下行テミレハ木ニケリテミエヌ遠テミユル也此説ヲ
先達用ト云云 奥義抄引後拾遺云ユカハコソアハスモアラヌ
竹帚木ノアリトハ割ヲトツレヨカシ 今勘國史云仁明天皇承和二年
六月、勅如聞東海東山兩道河津之處或渡舟數少或橋梁不
備由是貢調擔夫來集河邊累日經舟不得利涉宜每河加增
渡舟二艘其價重者須正稅亦造浮橋令得通行及建布施屋
備干橋寄造作料吉用救急稻云云 陽成天皇元慶四年
云弘仁十二年國分寺后法光為救百姓湫渡之難於越後國古
志郡渡戶濱建布施屋施墾田四拾余町渡舟二艘令往還之
人得其穩便而年代積久無人勞湫屋被損田疇荒廢相王請
被宥越後國徭五人永令預守云云 案之伏屋ハ曾原不
可限所々ニ是ヲ立ル欽 信濃國ニハ曾原ニ立ケルニヤ後賴哥
ニ山田守木曾ノフセヤヲ風吹ハアセツタヒシテウツヲトナフ
トイハレ改阻曾原相違欽磔言ハ谷ノ伏屋賤カ伏屋皆同物欽或説

云信濃ニ穴ヲホリテ葺板之傍ヲハ土ニ埋テ傍々ニ口ヲアケ
テワレヨリヲリノホル冬々雪ノ降テ深折之料也彼ヲ号伏屋云
あぢろふ
無端也
さばれとむがせど サラハサテアレト云心也
ししげみとこころ 恐ノ字也ヲソル心也亦ハ賢也

并一

空蟬 卷并事

ワツセミノ身ヲカテケル木下ニ
ナヲ人カラノナツカシキ哉

控物語云第ニ乃并春日久示亦才丑吹上卷之并久示日

菊ノ宴ヤトトテアリ亦瀨松物語ト云物ニモ并一狀アリコ
レ等ノ例也凡此物語之并ノ様一偏ニ同時之事共見ヘヌ
横豎有欵同續之事ヲ分テルトニ此并モ有ツレヲ豎ノ
ト并ト云ヘキニヤ今空蟬卷是也サレハ奥入ニ七二ノ并ト有レ
ト并帯木ノ次也并ト云ヘクモアラス一説ニ輝日ノ宮此卷本
并ノ一帯木ウツセミハニ夕白ト云ヘリ云 玉鬘ノ并ハ横豎
相交レリ未摘花閑屋蓬生ハ一向横ノ並也控ノ物語ノ并
モ横トミヘタリ瀨松ノ并モ唐ト日本トノ一ヲ同時並テ
書リ是モ横也凡并ノ本意ハ横ノ義タルヘキ也奥入モ猶
横ノ義ヲ存スル欵中ノ院事書ニ云尚書篇之立様此并ノ
義ニ相似タル欵彼序云以舜典合於去九典益稷合於自平
陶謨盤康三篇為二康王之誥合於顧命等也然共是ハ
今之並ノ心ニハタカヒタル也並乃隣匹方每并配是皆并
廣韻云并ハ合也亦詩賦序云每序ト書ルヲ官家説ニ序
ヲ合タリト讀之自餘ハ并ニ序ト讀之是モ今ノ並ノ心ニ

鄙相似歟

うきたたくも

たむらひも

ゆふやみれきたど

ころうたせも

慨哉也懐哉也以上見日本記

謀計也或方便也

万葉ニ風ノ共トアリ
其モ風ト共ニト云心ナリ
カエレワカセコクノニモ見ム

博物志ニ云堯造園基

音斯字亦作
基此同モ五

一云舜造之也晋中興

書ニ云園基堯舜以教愚子也

こころあやれひと急を何よりあふんとよそ

コキアヤハ

紅ノ色コキ也上ニキテハコウチキ歟軒端萩今獨モシロキウス

モノ、ヒトヘ重ニフタアヒノコウチキト三ヘタリ此卷ニモ彼ラス衣

ハコウチキノイトナツカシキ人香ニシナルトイヘリ然共モヤノ柱

ニワハニテサタカニニヘスト有ハ用意深キ由也仍何ニカアラントヲ

ホメク也

くねるおれ〜ひきゆへおほほど

撓腰也

そりそりくわりりてかし

傍側也アラハナル心也控物語云

若キ人ハ物笑仕給モノ也去ハサヤウニハウワクニモアララスト云也

そごあうる人あり〜らつさ

尖也スルトナリ

さかりばり〜ほほどいとさ〜げな

下場也勘文紫式部

假名記ニモ有此詞一隠装物語ニモツヤサカリハトアリイツ

シモ髪事

むづこしを

宜也固宜也漢書ニ諾也

なまぢきも道ゆとげな

園基結也亦爾心疾也心早キ也

さうどげな

早速也イワカハシクモノサハカシキ也

このり〜れ〜を〜

却也ツムル心歟

な〜び〜を〜め〜と〜を〜いた〜み〜を〜を〜ふ〜と〜の〜ふ〜多〜酒〜い〜れ

も〜げ〜た〜と〜な〜ど〜し〜し〜つ〜る〜ま〜り〜〜〜
伊豫ノ湯ユゲタハイク
雑藝イ伊与湯

ツイサシラヤカスヘスヤカスヘスヨニスヤクヨヤ君ブシルラニヤ

温泉記云豫州温泉者其勝冠絶於天下其名芳聞

直々シキキテテガウテシカチニトイハ
是モキスクナル躰ヲイフ歟

ぬさしとべりたる

眞風集 女ノ衣ヲ取テカヘリテカヘストテ

アフニテノカタミトテコソナドメケメ
ナミタニウカフモクズナリケリ

スベシタルハスベラカシタル也

れり

侍者也 白氏文集ニ

御許也 新撰示記ニ 遊仙窟云

渠ハ也

大鏡云イフカヒナキ程ノ物ニモアラスヲモト程ノキハ

ニテソアリケル和泉式部カ童名ヲ御許九ト云ケリ

こまをうつゝぬてあつとまざる 別也行列之心也アキニウツ子

タル也

空蟬ハ蟬ノ蛻也文選ニ蟬蛻ト書リカノヌキス(シタル衣ニ

ヨウ(テイ)イヘリ一髪ニ打聲名蟬共云リ蟬声 聲ヲ打ニ似タル故也

ウチリ(テ)子ヲキクラスウツセニ

ムナシキコヒモワシハスルカナ

後撰ニ

人ぐふしとみそ 人香也

いせこれあまの唇をかきてや

鈴麻川イセヲノアノヌレ衣
塩馴タリト人ヤミルラン

五十五

奥入 鈴麻川イセヲノ海士ノステ衣

ミホナレタリト人ヤミルラン

衣ヲ置テ取ニツカハストテトアリ

後撰ニ 伊尹朝臣之許ニ

又ある人むかひさことらまバ 古今ニ

あさひりみし 浅ク無基心歎

モソリメノアサハサ夜アサハニ

ヲモヒテイモニアハニモノカモ

もしはぐりのこゝろあつとぬり急を物めり福ど

トリヤ(ス)モニモカナヤ世中ヲ

めてはさひるる

可愛也 遊仙窟ニ娃媼也上同

此哥伊セ集ニアリ如此事古今ニ多シ伊セ物語ニモ始テ讀タ

ルノ哥等也 我ウヘニ露ゾクナルアノ川ノ哥ノ下句モ

赤人哥ニ 此夕降タル雨ハヒコボシノ

ノ哥ニ同也 隠世裏物語ニ

是モ古今ノ花カタミノ哥ニ也

薫モノ目ナラフ人多有ハ

ワスラレヌラニカスナラヌ身ハ

字ノ外ハカハラス 亦此物語之過ニモ今日別ルモ二道ノ号
モ秋宮女御之集ニアリ如此不可勝計

并

夕顔

三位中将女折夕顔華置肩送光源氏云詞源正号
六條

御息所秋好中宮母前坊御息所也在所也中将御息所負信云女前坊御息所也

後ニ重明親王之北方ニ成此例歟秋宮女御母大臣女等

事一同也 伊也物語昔九大臣在計利久茂河邊六條

渡介家平取面造而任給計利

大貳のめれと

乳母也 職負令 有部ヒヤヤ那田名師子胤

其父以兒授ハ乳母文字集畧曰爾乃礼及 華嚴經曰檀

波羅密為乳尸羅辨色立成云乳母知於毛乳人母也波羅

或曰傳姆メノト唐式曰白皇子皇孫乳母和名女史記傳云

武帝ノ小時ニ東武侯母嘗養帝ニ杜時能度蹄之曰武帝

日本記曰天孫取婦人為乳母陽母及飯爵陽坐矣凡諸神
部備行以養享之時權用他婦以乳養白王子正号此世取乳
母養兒之縁也 今曰凡親王及子者給母 謂若內親王
嫁諸王所生子者不在給限 親王三人子二人所養年十三以上雖乳

母身死不得更立替 古今集作者紀乳母陽成院御乳母

不多あわつ

伊也物語昔男五條渡成女ヲ不得成ニケリ

くはら

竹取守津保隱蓑等ノ古物語ニハ多実名ヲ

顯事アリ此物語ニ名字ヲ示スル事希也惟光良清時方長

信通定平 童常右六人宮侍也 房有由歟

九條右丞相記云天曆十一年三月廿日看南間文範朝臣申

惟光朝臣可為所監之由其詞次第相違云 此外寬弘比

此名字アニ夕アリケリ

藤原惟光
フナハラコシミツ

寬弘元年正月召名任常陸

權公同六年三月廿日任中務少輔

平惟光

夕イラノコレミツ

寛弘六年正月廿八日

二月十六日任左将監

長和六年正月九日
補藏人見權記

任左衛門權少 同七年

大藏惟光

葛井惟光

藤井惟光

子井コレミツ

寛弘元年十月七日任越前權大掾

寛弘二年二月廿日任因幡大目次泉院御給

寛弘三年十月晦日任美濃權大目左衛門

亦御堂関白申文良清

惟光申揚名々云

にほらのさま

路也御路也 日本記大路也 万葉ニ

春ノ日ニハレル柳ヲ取持テ

万葉ニ

とみ

半部也

ささこをいせ路リす 隠聲也

昔ハ内々ノ歩ニモ先ヲ追

ケリト云 云為用心也變化ノ物ニ先ノ聲ニ思ルト云リ 西宮大

臣神泉苑ノ良角ニテ 變化之物ニ被達ケルニモ先ノ聲

仕ル時分引入ケルトアリ 是ハコトサラヤウシタレハサキモコハ
スト云也

ういといあともみれやうりあ

諸織戸ナト欵

うづくろくろく

世中ハイツクヲサシテワカナラン
行トニヨソ宿トサタムル
作セニモノウテサモエムクラ
ハハラシヤトニフタリコソ子メ

ころまのけだうめ

紫明抄云

公良三位カ説トテタケニヒタ

ふとれまのひらけたる

早晚昇平宅 開テ見君唾

開笑也 展愁眉也 以上白氏文集

數々ニ君カタヨリテヒクナレハ
柳ノ眉ハ今ソロウリル

蜻蛉日記ニ見タリ

をら

ウチワタスヲチカタ人ニ物申
我ソクニシヨク咲ルハ何ノ花ソモ

此本歌ハ梅花也

去共白咲ル下云ニ付テ今ハ夕魚ノ花ニ思ヨソハラシタル也

みぞいしむ

聖德太子甲斐黑駒ニ令ニ乗給而空ヲ翔

給ニ秦川勝一人御馬之口ニ付テ廻ケル是隨身盤觴

こ乃しおれ也

此面彼面也此方彼方ト云同詞也遊

仙窟ニ 兩邊ヲ此方彼方ト讀リ古今竹葉根ノコノモカノモカケハアレト

山凡ノフキノニニニ紅葉々キニカ御影ニスカケハナシ

被問鳥ルニ後成竹紀兼ナトハ一向ニ筑波山計ニ可讀詞成ト被申

ケルヲ清捕躬恒カ和哥ノ序ニ大井川ニ此面彼面ト書リ

然ハ筑波山ニ不可限申鳥リト云見顯昭抄ニ定家郷僻

安抄ニハコノモカノモトハ此面彼面ト書ルト也四方ニ散心也筑

波山ニ社讀ト云事有レト可有何國モ事也云父子相違歟

如何案之筑波山ニ不可限者也紀貫之堰行幸和哥

序ニモ我等短キ心此面彼面ニ惑イト有リ此方彼方トイフ

心也

ひましくしりしを

不宗々歟宗ハ廣韻云無也本也尊也

古今ニ 余所ニ見テ帰ラン人ニ藤花

ハイニツハレヨ枝ハヨルトモ

されはるやまをくら

左道成ヤリ戸口也後頼口傳ニサレ

哥ト云ルモ誹諧鉢也ユカニナトシタル戸口也

あゝさるればいたうこがたる

白扇ノ香ニシタル也

後成郷説ノコトキハコカストハ薰ニシミタル心也一説ニ白扇ノ香妻歟

香色成歟

鑰也

ふびんか

不便也ヒシナキ也

おれあやめ

綾目也

亦黑白也文目也

文ヲアヤトヨム也

ホト、キスナリヤ五月ノアヤナ草

清捕朝臣與義抄云黒

白モ不知云様成事也サシテソノトハ云カタキコト也加様ノ言

葉ハ書籍ニモタシカニシカシカトニハタレリモナシ唯大意ヲ以テ

推量テ云レ也ト古人モ申鳥ル

兼成哥ニ

奥山ノユウハイカテヲリツラン

顯註密勘抄云

定家郷云

アヤナモシラス雪ノフレルニ

無文物ハスクナシアミナ

錦織物ヲ始テ亀甲具ノカウニテ

目コノ目キヌ目布目ナト云ヨリ色深ニハワカシタラヌ時ハ先文
ト目トノ見ワカルヲクフキヤミニモナリ心モホレボレシク云カイ
ナク成ヌレハ其物ノ姿ヲミレトアヤナナドノワカレヲアヤナニ
ラスト云トソ被申也

あしやも

安惠

内供奉 慈覚大師ノ弟 弟子天台座主 弟子如補阿闍利也

おりにふるふるあしをまきかきさるる 亦毎キ事也一説

云末無歟

源氏太貳乳母カ家ニ御座タルノ末無リ

集ル也

たのふいしうど

猶豫也

百葉ニヤスラフ心也

いむことれあうまふうみぐうて

受戒也 蘇生也 又活

かたか 獨樟

遷也

延喜式ニ 禊也

ヨサナク

カテナリナル心也

つきしうみ

突也

サシワキテ言葉ニイハヌ躰也

一説二月ノ出ヤラテ先月シロアカリタルヲ云也人モ詞ニハ云
出サテツキニヨシイミタル躰ヲ云也或亦アラハニ指不出篇
ノハツレ障子ノロサトニ出懸リタル躰ヲモ云歟
人とあつて 長而也 史記殷本記ニ為人也同呂后本

記ニ長成也 為性也

さしぬりきいりくしぐらとらん

伊ニ世中ニサラヌワカレノナク哉 千世モト祈ル人ノ子ノタメ

老ヲレハサラヌワカレノ有トイハ 弥々ニミナリホシキ君カナ

ほせこころで

廣ク多キ心也

祈モセキアヘヌト云歟

亦廣大也

みまぐせ

御宿前世歟也

いあそるをれうとをつる 白落れむりりなる夕白れ花

心アテニヨラハヤヨラン 初霜ノヨキマトハセル白菊ノ花

心當ハ思當也 光源氏ヲ未見知

共思當ニモシルキトイハル也 詞ニモニタミ又御サマナリケレト
イトシルク思被當給ハルトアリ 亦夕顔ノ花ヲ美

人ニ喩フル事ノ説アルナリ

てとあてをふふゆへづきたれい
うぬさし

どうざれことを

やうめいれをけ来人のいへふん

源人之成る官也

權記云 藤原常直申揚名

然に不限源氏人歟 奥入云此事源氏第一難義也非可勘知

事 杯往古除目揚名人可有見たり

其家ニイルルキ無道理 此事家々所稱蘭菊各々不究

淵源當流兩家深奥之説依為極秘説在口傳正与

しとれみて

或好事者其以錢帛也 孝經序ニ
腹族也 兄才也 日本記ニ

たうぐみ

夕、ウカニ哥ヲ書テ可勘也

ふるををれりともぬめたるのきふほのくつる花の夕息

萃容無止

百葉ニ此哥ノ五文字ニテコト書ル有本扱

社花ヲ折ニモ亦車ヨリヲル心ニモカヨヒタレト云ヌモ有歟

然而古本ニ皆ヨリテコトアリホノボノミワルトアルセチ

カツキテコトワレ氏ニモト云也

あまえて 驕也

御前松明也

ゲニ勝也或亦賢也 螢ヨリニサリテモユル也 異 百葉ニ

異計也 見日本記

あさげれもがさ

朝明也 又且同容義

百葉ニ

ワカセコカアサケノ姿ヨクミステ

アサケノスカタミシハカナシキ

かりがさのいもみ

古今ニ

延喜式ニ襦也 覆袴之衣也

あむらだつねのじとばう

内藏寮ニ

賀與下襦 勘文

禁花物語云

廿房四人計ウスケノシヒラカコト
かりユヒツケタリシヒラハ上裳也

人れりわくそいとくくわくが

佳人也 日本記ニ

福ひたましと

少年老たれ心也

年預人同也 調行

いあそたぐく

周章也 擾也

あけのそぐくひぬ

ナイカシロ也

秋もあぬ人やうかぬぬづぐくに

人ヤリノミチナラナクニ大方ハ
イキウシト云テイサ帰ナン
難過

志をんまれわうふあひたううも物れとあざやうひひさ
あひたる

ヨ尋常ニハシヲニ色ノモト心エタル歎僻事也シヲニ色ノヨリニ

アヒタリト可讀切此糸苑色ノ衣ニ草物ノ志也紫苑色
トハ面ハ蕨粉也重衣ハ萌黄也

物の情をあぬぬらぐつと死のげぬみあをやまういま
ほくさあや

大伴黒主ハソノサニハイヤシキタキ木ヲ履ル山人之花ノ陰ニ休

ナルカトシ古今序ニ

かや 中屋也 俗ニ中居ト云也 万葉十六ニ 橋ノ寺ノナカヤニウカイミ

あかりまとしてうく 手搔也

うらほ 打橋也 世ノ山ニ唯ニムカヘルイモノ山
コトスルスマセウチハタス

拾遺ニ 金山峯山縁起云

役優婆塞 金山山与葛城峯為行通於兩山召集

諸國諸神令渡橋之時金山大神不勝咒力而且作始之
葛城一言主大神又且始作申於行者云自取を醜夜回作

云云 依嚴然思之

こどゆりわうハ 小舎人童也 小舎人ハ 立童ノ惣名也

くだくしけれハ 細碎也 日本記 白氏文集ニ

やつまらひつ 襠褌也 日本記 定作也 褌ハヤフシコロモ也

なまさうぐ 氣装人也 亦假相人也 新猿示記

伊勢物語真名本

將衣也 短裳衣也 旧事本記

ひりのしほ

中開白為女將

之時語赤染兄才女而忌給之後彼女奉侍女將日暮卷南面簾詠居然間直衣人奇香甚人來彼殿也女有悦心會合其後夜々來但曉夕無車馬声成恠以長緒付針差直衣神朝此緒留於南庭樹上其後亦無來是鬼魅之所為歟古人歌載此已以謬也中開白女將間天延負元天元比也而寬弘以往世年也彼公亦至一條院御宇存生也難称昔事歟况准延喜時代者弥以參差者歟三輪明神者倭迹迹日百襲姬命也 日本記之心ハコホモノ又ニノ神ノ妻也然コ其神畫ハ不見夜來倭迹迹姫ノ見シカト夫ニ語テ日君常ニ不見畫明顔無見事願暫トトシテシカテ見ント云

答曰君カリシゲノ中ニ居勿驚事倭迹迹姫命心内ニ恠ム夜明テリシゲコ閑見ニ麗小蛇有リ 御衣紋ノ如敬馬テ叫ブ時大神耻テ忽ニ人形ニ成其妻ニ語云汝我ニ耻ヲ見ス我帰テイニシニハキニセント云テ大空ヲ蹈テ三諸山ニ登ス又ニ倭迹迹姫ノ命見御悔テ急居則著撞陰而薨コホイキニフルトキ人墓ヲ著墓ト云此墓畫ハ人竹染夜神築給大坂山ノ石ヲ運テ作自山墓ニ至迄人民相續テ手邊傳而運時人讀テ云 大坂ニワキテノハレル石ムラヲ 先代旧事本記曰大己貴神乘天羽車大鷲不見不見妻不見妻偶下々行於節渡縣取女大陶祇女子活玉依姫為妻往來之時人非所知而容往來之間為任身之時父母疑恠問曰誰人來耶女子答曰神人狀來自屋上零人來坐共覆卧耳介時父母忽欲察頭績麻作綜以針鉤係神人短裳衣而明且隨絲尋覓越自鎰坑經竹即渡山入吉野山留三諸山當知

大神、則見其綜遺。唯有二紫子、二輪山、謂大三輪神。
社矣

あづれありけい
サレ同事也
狐假女妖、字猶淺。一朝一夕、

迷人眼、女為狐媚、字却深。日增月長、溺人心。
白氏文集名山記曰

狐者先古、淫婦也。其名曰紫、化而為婦、故名称阿紫。
玄

中記曰、五十歲、狐為淫婦、百歲、狐為美女、為巫神。
抱朴子曰、

王榮記曰、狐及狸、狼皆壽八百歲、滿三百、暫變為人、
帝王系、畜之。
欽明天皇御宇、糸河國、狐成人妻、云水鏡、

有此事也。万葉、
サスナベニユハカセツ子エツノヒ
夜、明ハキツニハナナテクタカケノ
夜、フカク鳴テセナヲヤリツル
伊二

かり
稔也、農也、和名、東作也、稼穡也、上同、農業也
日本記、田宅、上同

いほぐとるる、
蜻蛉日記云、空クラカリシ、松風ノ音、高亭

かぬ
確也、音對亦、作確也
踏、舂具也
獨到山下宿、靜向月中行、何処水邊確、夜舂雲母声

まろくつぐみ
枕上也
あろくつぐみの、
本、終也

あろくつぐみ
本、終也
あろくつぐみの、
本、終也

あろくつぐみ
本、終也
あろくつぐみの、
本、終也

あろくつぐみ
本、終也
あろくつぐみの、
本、終也

あろくつぐみ
本、終也
あろくつぐみの、
本、終也

あろくつぐみ
本、終也
あろくつぐみの、
本、終也

あろくつぐみ
本、終也
あろくつぐみの、
本、終也

心をみたるるる

心有方也

ヨシアルヲヨシハミナト云也 心ハ

テニヨハセ

みだけさうじ

御嵩ハ金峯山也 清女納言 枕双紙ニハ

衣成物若男之御嵩精進シタル定タル人クシタルモアハヲヨナ

ヨナハタルヲハクルニキコトニコソ思ヘカタルヲコトノ外ニキヒシクヘタ

テナシテヒトリケテウチヲコトヒタルアカツキノ子カノホトイミ

シクヒ衣也 二吉野ノミカ子ノタケ 万葉十三

明玉集 アサモヨヒキノ川上ヲ今朝ミレハ

ぬぶく 額突ハ替首也 額并也 垣ノシリヘニチカワクカコト 万葉

六帖ニ地祇布之氏 額并可賀受也

あしたの夜 ぬくをのみをひさぼる身れあいに

居系卯之危而圖太山之安 為朝露之行而思傳世世功

蘓子曰人生一世若朝露之託於相葉耳其而幾何竹山豈不

惑哉云云 後漢書列傳 三十九王符傳

七十而致仕

礼法有明文

何乃貪業者

斯言如不聞

白氏文集

可隣八九十

齒落双眸昏

朝露貪名利

夕陽憂子孫 秦中吟ニ

あるは身身身とぞたがひわ

金剛藏王 過去釈

迎現在觀音

當來弥勒也

弥勒出世之時地 可敷金ヲ

守給神也

仍御嵩精進ニ弥勒ヲ礼スル歟 弥勒ハ釋迦ノ

附囑ヲ請テ一生補処菩薩トス 第一滅却始 下生仕給テ

成仏而三會ニ法ヲ可説故ニ當來導師トハ申也

うはやくらねこふらをあらみてこむせもふりさかたふか

優婆塞ハ乍俗佛弟子ニ入人也 比丘比丘尼優婆塞 優婆夷

四部弟子ト云也

涅槃經ニ云 若有善男子善女人 諸根充

具受ニ歸依是則名為優婆塞ト 亦曰若受ニ歸及

受ニ戒是名一分優婆塞ト

ウハツクカヲコナフ山ノ推カ本

長生殿のゆりささなりいひていひていひていひて

七月七日長生殿夜半 每人

私語時在天願作比翼鳥 在

地願為連理枝

みろくのををのり

辛七俱^御脛六十百千歳^{往生}要集

從^二釈尊入滅至^三慈尊出世^一隔^二彌勒下生^一經^二三將來久遠劫於^三此國東

こちる^一ヲホキ心也

いざよふ月^二みゆ^一り^二あ^一く^二あ^一く^二が^一まん^二と^一を^二山ノ端ニイサヨフ月ヲ出

ニカト待ワツヨルニ夜ヲ更ニケリ イサヨヒノ月トハ十六日ノ月ノ山端ニ月シロ

アカリテ出ヤラヌヲ云也是モ十五夜ノ曉ナハ十六日ノ月ト云ニモイタリ不
違歎能因哥枕ニモイサヨフトハ山端ニ差出ル月ヲ云也但イサヨフ

ハ何モヤスラフ義也猶豫ト書リ ^{モノノフノヤフヲナリ川ノアシノ果ニ}

万ニ^{キニヤコシレヤユカシノイサヨヒニ}カウラクノハツセノ山ノ山ノキハニ

ニ^{キノ板戸モサノズ子ニケリ}イサヨフ雲ハ妹ニヤアルラン

ヤスラフ義也或説ニイサヨフハイザナフ心ナリサフフ心也^然而倡^{サツラト}

慥ニ讀ル證哥未^勘出今哥万葉ニハ不知夜歷ト書リ強
十六日ニカギラザルモノナリ

ち^二り^一か^二く^一 不意之間 ^{日本記ニ} 卒介也 ^{日本原抄云} 案之

不意之義ハトリア^ハ又心歎思ヨリモナク也 ^{赤符モ今ノ心ニハ}

か^二り^一の院 ^{六条坊門万里小路坊門南万里小路東}

相叶^二京極御息所先蹤^一歎 ^{河原院歎自五条ソノワタリ}

チカキナニカシノ院トアレハ也彼院^二九大臣融^一旧宅也 ^{亦号ニ六條}

院後宇多院御領也 ^{延喜御記ニ云此日久多^ニ六條}

院此院是故九大臣源融朝臣宅也大納言源朝臣奉^遣於^院

あ^二づ^一 ^{諸院ニ別當有預御記云天曆七年因正}

月廿八日令請小野之盛^為院 ^{冷泉院 預事 仰依請以之盛}

令補預 ^{本ノ終}

ま^二こ^一 ^{驚キテナト云詞也一説ニ經營歎ナトエト云旨}

け^二い^一め ^敬

横通ノ字也 蜻蛉日記ニモヲサナキ人ケイメイシテトアリ

志しげいし 下家司也

をさかか川

鳩鳥ノ沖中川ハ絶又凡君ニカタラフコトツキメヤハ

或云沖中川トハ名所也

翁川ヲキナガ川凡アリ

水原抄云ニキハ枝川ハヒルコトアレト本

躰ノ川沖中ハ絶ル古又ナシ如其君ニカタラフコトツキメヤトイ

ハレ歎

本立いとらとま〜く皆杖のり〜めて

古今ニ

里ハアレテ人ハ古ニシ宿ナレヤニハモニカキモアキノノラナル

寝らるるれ〜めて〜し〜て

李部王記ニ

天慶三年十月廿七日己剋冷然院別納所失火

此外諸院多

在之別納ハ別ニ建タル屋也別納ニテ大空食ヲコナハシタルコト

多シ小寝殿也

け〜と〜く 気疎也 亦気外也

た〜う〜に〜ん〜し〜ほ〜み〜を〜る〜れ 縁也

光るると〜夕魚のと〜病〜た〜れ〜り〜き〜時〜の〜め〜り〜り〜り

此光源氏ヲ光アリトミシカ今ハソラメニテアリケリトツシリタルヤリニ常ノ人ハ心エタルニヤサニハアラスサキニ心アテニソレカトツミルト云シハ源氏カト見知レト云心也〜ヤ〜友ニ云出シテ露ノ光ヤ如何ニト問シタルニアナガチニツム気色成ヲ女ノ方ヨリサシスギテ云タリケルニ思テ其人カトミシハ空目ニテアリケリトヨホメキタル心也

あまのこ〜り〜き〜ハ

あいごき〜たり

ま〜き〜り〜り〜り

つ〜と〜り〜り〜り〜り

そ〜ひ〜ふ〜

〜ち〜を〜む〜さ〜ぬ〜さ〜て

〜び〜こ〜れ〜こ〜ろ〜あ〜る〜

ツレモナキ人ヲコフトテ山ヒコノコタヘスルニテナケキワル哉

添臥也

横刀也

見日本記

山孫也 古今 折位テヨハナシコニ山ヒコノコタヘスルハアラシトワ思

アニハタル躰也

アニノカレモニム虫ノワレカヲト音ヲコソナカメサハハウラミシ 直子朝臣

日本記ニハ 集也

添臥也

横刀也

山孫也 古今 折位テヨハナシコニ山ヒコノコタヘスルハアラシトワ思

あせと志しくに

トニヌシテトヒキニケリ

秋キリニシトニヌシテヨフコ鳥
サヲノ山ニナキワタルナリ

ひるしあをるをろこふるのめを

病者ノ空ヲミルハ死相ノワナリ云

いとをしくと

憐也

うへまろくハ

殿上童也

わきわかれろくさみせ

落タタニモ何共ニスニユレ
ワレカモトフコトノシケキニ

安永之此哥

詞不可致古今我カ人カト身ヲタトル世ニ此哥ノ心致

たさくらら

滝口也

在御所近邊
隨時義海内

寛平被殺十人二十人
下有發食追月奏

見干西宮抄

ゆづる

弓絃也

アワサヲリス工野ノ原ニトカリスル
キニカユルノ立ントヲモフナ

火あやうし

誰何火行也史記ニ

本朝文粹ニ 夜行

翁夜々敬言火田府中

呼曰火危彼誰何 源順 夜行舎入
鳥養 有三歌

うらをねがしやアそふだいめんハもさぬらんたさくら
れとのねア今こそとをうけぬんたさくら

亥一刻侍臣名對面

起自延喜
元年

同亥一刻侍臣奏之

後

瀧口武士名對面 延喜九年正月廿日藏人源揚宣旨之

候 瀧口筆三箇夜以上毎殿不參早預著到宜待後仰

矣

まうち

丸ト云名昔多且亦男子通稱タル欽公卿補任モ

大宝ノ比高市朝臣磨呂石上朝臣磨呂紀朝臣磨呂ナト

シテ同時ニ其數有リ藤氏四家ニモ

京向丸

京家始た京大夫磨呂

云亦何丸ト云名不可勝計

巨勢丸

續日本記ニモ多見上

古人ノ名字シドケナクテ 我ト定テツキタルアリ 亦後

人之喚ツケタリトニユルモアル也 名字タシカナラサルモノヲヨ

リヨリ磨呂トイハルモアル姓氏録ニモ校本氏ニ先祖磨

呂トテアリ亦子孫ニモ丸アリサノミ父子同名ハアコト

ヲホユル也 今ノ丸モ所ヲエタル人之通稱ニツキ名彙タルカ

孝經註ニモ子ハ孔子也師一而已ト云ガコトシ

ひりつ物後などみあそびのりこいとひきけと

寛平法皇子京極御息所同車渡河原院歴覽山川形勢入
夜月明令取御車疊一段為御座与御息所被行房
内浙之間閑塗篋之戸有於声法皇令問給對云齋候
欲賜御息所法皇答云汝存生之時為臣下我為天子
何得出此語乎早可退歸靈物抱御息所御腰半死
前駈等皆候中门外御声不可及遠牛童願近侍食御
牛童召件牛童令召人々差寄御車令乘御御息
所顔色每之不能起立之扶抱乘還御之後召淨藏大
法師令加持總蘓生云法皇依先世之行業為日本帝
王雖避宝位神祇奉守護追退齋靈也件戸西有打
物跡

あがきよみ
けいひゆとをくわりて

我君歎

我子ヲアコト云也

人ノ神ニ魂魄二類有

三魂ハ
肉ヲ守魂也天人ノ形也丑陰離散スレハ遠ハナレ行隔生之
魂也七魄ハ屍ヲ守真形如鬼神 丑六歳許ノモノテ小
神通有リ是ヲ無相法身ト習也十三年ニ本有ニ帰也十
三年迄ハ屍ニ添テ居タル也去ハ魂ハ去リ魄ハ留ル程ニ懷數
氣遠カハ物遅成也

南殿にのりまぎのむとをびやうらん

世継云此殿ハ貞信公也世継云何レノ御時トハ覺不待思ニ延
喜朱雀院ノ御程ヲソハ侍ケト宣旨為被兼給テ行陣ノ
座サニ御座入道ニ南殿ノ御帳ノ後ノ程通ラセ給ニ物ノ
ケハヒシテ御劔ノイシツキヲトラヘタリケレハイトアヤシクテサ
ガラセ給ニ毛ハムクムクトヨヒタル手ノ爪長クカタナノ爪ノマウ
ナルニ鬼成ケリトイトヨソシクヨホシナシケレトヨクシタルサニラミ
エジト念セサセ給テヲホヤケノ勅定兼リテサタナニ冬ノ人ト
ラフルハ何物グモサスハアシカリナントテ御太刀ヲヒキチキ

テ是^レカキヲトラヘサセ給ヘリケレハドトテウチハナチテ
丑寅ノスミサニニカリケリ 見大鏡

むくくし 春虫也

松乃むびきこぶりくゆえてりさる多れうゝ急に
鳴をるもふくろうハ急ムヤとススス
鳥古云友 説文

云食父母不孝鳥也

鳥鳴松桂枝^ニ 徂藏^ニ 蘭菊^ニ 兼^ニ 芙蓉^ニ 苔^ニ 黄葉^ニ 地日暮多^ニ 旋風^ニ
白氏文集五宅詩也

火いなのうみまむたさそ 灯ノカスカニヒラメクハ人ノ目

タキニ似ト云一説未焼歟篝事也

あつもうさぶらぬあのみて 古今 凡ノ上ニアリカサタメ又チリノ身ハ
行エモシラスナリタヘラナリ
イハヌニハ千年ヲスタルコトナリ
ニワハニラトニヒサシカリケリ

奥入云此哥ハ近代哥歟 不足為^レ證哥後拾遺現存作
者隆方哥也

まいるぬ清似地

不例也

よくとあさぬ 君ヨリヨ、ヨ、ヨ、トヨ、ヨ、ト
音ヲノミソナクヨ、ヨ、ト

急事歟 俄成心也

伊勢

とみれことには

物語云シハスハカリニトミノコトトテ有御文^ニ 敬馬^ニ テ見ハ哥アリ

老ヌレハ哥也

本ノ終

渥志みゆる人あそ

春属也 或^ハ支離也

みつわがみて

日本記云 水神因象女因象此云美

都波伊弉諾尊所生神也 髮白而 有^レ老嫗躰也ト有

後^ニ 年^ニ フレハ我黒髪モ白川ノ 一説ニ年寄ヌレハ腰カガマリセリ

ガニリテニノ膝トガリイテタル中ニカシラ交テニノ輪ヲクミイ

レタルガコトナリ云

かごうふ 俗ニカゴガトシタルト云心歟 四圍共云カフメ

タル心也

ういむるりよろくくみて

類聚國史云弘仁八年

八月從三位攝朝臣常子薨

延喜年中授從四位

下宮車晏駕出家為尼

太上天皇敬重之叙

從三位及千萬遺言と氣絶則以席裏葬莫須時日棺

歛薨時年二十

あふふささみ

十娘曰兒近來患嗽聲立不徹

遊仙窟嗽病咳嗽也

いさひ若みしわらひりぬと

世中ノウキタヒコトニ身ヲケハ

案之此哥不可鳥邊山ノ谷歟在拾遺集彼心也

いとむろいりて

無礼也 毛詩 女也 荒淫也スサハ

ナヲサリト也

いひるもさまるといふると

異也 アラサニニス也

争也

伊勢物語真名本ニ

とらへ野乃のつらたぬと

山城國風土記云

南鳥部里称鳥部者秦公伊呂具的餅化鳥飛而后其

所森々鳥部也

鳥部山谷ニケケリノモエタラハ

拾ニ

こゝろ

小堂也

こゝろたてぬ念仏 万歳身後救云喪家佛事次第葬

送以前無言念仏以歸立之刻限仏事勤之仏経供養支

立之時葬送以前之日数雖何箇日分今夜可勤業也無

言念佛得十五功德之由見聖教

ちくのそやと

諸寺也 初夜後夜之長講トテ行也

こゝろ

千手経云不為非分客死誦持大悲神

咒縁起云清水者在山城国丹波郡八坂郷东山上矣

千手観音灵驗之地行猷居士孤菴之跡也宝亀十一年初

建立草堂彫刻本尊延曆十七年七月二日更^ニ雖^ニ造^ニ大^ニ仏^ニ
殿大同二年亦造^ニ閣^ニ伽藍^ニ法^ニ号^ニ小^ニ觀^ニ音^ニ寺^ニ堂^ニ前^ニ之^ニ額^ニ清^ニ水^ニ
寺^ニ題^ニ大^ニ門^ニ之^ニ額^ニ延^ニ曆^ニ二^ニ十^ニ四^ニ年^ニ十^ニ月^ニ十^ニ七^ニ日^ニ給^ニ大^ニ政^ニ官^ニ符^ニ東^ニ寺^ニ
領^ニ四^ニ至^ニ^{東限高峯西限公田南限尾振谷北限大道}此^ニ仏^ニ殿^ニ以^ニ坂^ニ上^ニ田^ニ村^ニ磨^ニ呂^ニ私^ニ宅^ニ安^ニ可^ニ
附^ニ沙^ニ弥^ニ賢^ニ心^ニ号^ニ延^ニ鎮^ニ云^ニ云^ニ坂^ニ大^ニ納^ニ言^ニ建^ニ立^ニ記^ニ畧^ニ之^ニ
大^ニと^ニく^ニ大^ニ德^ニ也^ニ日^ニ本^ニ記^ニ肅^ニ宗^ニ制^ニ天^ニ下^ニ各^ニ山^ニ置^ニ大^ニ德^ニ七^ニ人^ニ
僧^ニ之^ニ官^ニ德^ニ也^ニ云^ニ云^ニ
は^ニく^ニみ^ニれ^ニほ^ニど^ニ波^ニ堤^ニ也^ニ蓄^ニ水^ニ曰^ニ波^ニ音^ニ碑^ニ禮^ニ記^ニ經^ニ纂^ニ
要^ニ曰^ニ築^ニ土^ニ過^ニ水^ニ曰^ニ塘^ニ音^ニ唐^ニ亦^ニ謂^ニ之^ニ堤^ニ音^ニ低^ニ字^ニ亦^ニ作^ニ堤^ニ也^ニ
か^ニり^ニぬ^ニれ^ニを^ニみ^ニて^ニを^ニふ^ニき^ニぬ^ニべ^ニき^ニや^ニ者^ニ也^ニ
放^ニ埒^ニ也^ニ立^ニ行^ニユ^ニク^ニエ^ニモ^ニシ^ニラ^ニス^ニカ^ニク^ニノ^ニミ^ニラ^ニ
立^ニ行^ニユ^ニク^ニエ^ニモ^ニシ^ニラ^ニス^ニカ^ニク^ニノ^ニミ^ニラ^ニ
三^ニ十^ニノ^ニソ^ニラ^ニニ^ニテ^ニト^ニフ^ニヘ^ニラ^ニナ^ニリ^ニ
ワ^ニ北^ニ心^ニヲ^ニタ^ニニ^ニモ^ニイ^ニフ^ニラ^ニサ^ニシ^ニト^ニアリ^ニ
り^ニ且^ニれ^ニ多^ニく^ニみ^ニて^ニを^ニあ^ニら^ニひ^ニて^ニ
中^ニ流^ニ洗^ニ手^ニ文^ニ有^ニリ^ニ可^ニ勘^ニ入^ニ也^ニ
優^ニ婆^ニ塞^ニ戒^ニ經^ニニ^ニ

ぶ^ニく^ニい^ニと^ニく^ニあ^ニく^ニし^ニを^ニか^ニら^ニぬ^ニど^ニう^ニか^ニら^ニぬ^ニど^ニう^ニか^ニら^ニぬ^ニど^ニう^ニか^ニら^ニぬ^ニど^ニ
く^ニし^ニり^ニぬ^ニわ^ニり^ニど^ニ也^ニ
清^ニ少^ニ納^ニ言^ニ枕^ニ双^ニ紙^ニフ^ニク^ニイ^ニト^ニク^ニロ^ニキ^ニヲ^ニト^ニコ^ニシ^ニラ^ニハ^ニリ^ニキ^ニタ^ニト^ニアリ^ニ
源^ニ光^ニ行^ニ後^ニ成^ニ郷^ニニ^ニ申^ニ談^ニノ^ニ而^ニ此^ニ物^ニ語^ニ之^ニ句^ニヲ^ニカ^ニク^ニ声^ニヲ^ニサ^ニシ^ニケ^ニル^ニ
時^ニ多^ニク^ニ至^ニテ^ニ筆^ニヲ^ニサ^ニテ^ニ右^ニ近^ニ初^ニ多^ニク^ニ之^ニ時^ニ分^ニ且^ニ亦^ニ穩^ニ密^ニノ^ニ
古^ニ也^ニ着^ニ服^ニ不^ニ可^ニ然^ニ被^ニ申^ニケ^ニル^ニニ^ニ清^ニ少^ニ納^ニ言^ニ枕^ニ双^ニ紙^ニニ^ニモ^ニ有^ニト^ニ
テ^ニス^ニミ^ニテ^ニ声^ニヲ^ニサ^ニレ^ニケ^ニリ^ニ此^ニ古^ニ也^ニヲ^ニ不^ニ知^ニ人^ニ人^ニ服^ニ之^ニ多^ニク^ニ立^ニ歟^ニ
フ^ニク^ニリ^ニト^ニク^ニロ^ニキ^ニト^ニリ^ニイ^ニト^ニリ^ニハ^ニ立^ニ音^ニ横^ニ通^ニ之^ニ字^ニ也^ニ何^ニモ^ニ通^ニ用^ニ常^ニ
ノ^ニ古^ニ也^ニ譬^ニ言^ニハ^ニフ^ニク^ニラ^ニカ^ニニ^ニテ^ニ色^ニ黒^ニキ^ニ也^ニ著^ニ物^ニニ^ニ依^ニテ^ニ空^ニノ^ニ善^ニ惡^ニ
ヲ^ニ書^ニツ^ニカ^ニサ^ニル^ニ也^ニ一^ニ説^ニ服^ニ最^ニ黒^ニ歟^ニ主^ニ君^ニノ^ニ服^ニヲ^ニ著^ニ事^ニ批^ニ
把^ニ大^ニ納^ニ言^ニ延^ニ光^ニ一^ニ生^ニ之^ニ間^ニ着^ニ村^ニ上^ニ天^ニ皇^ニ御^ニ服^ニ不^ニ憚^ニ云^ニ云^ニ仕^ニ云^ニ
此^ニ等^ニ例^ニ歟^ニ後^ニ成^ニ郷^ニ女^ニ如^ニ何^ニ阿^ニ仏^ニ禪^ニ尼^ニト^ニト^ニ此^ニ多^ニク^ニ云^ニケ^ニル^ニ中^ニ院^ニ
事^ニ書^ニニ^ニモ^ニ猶^ニ服^ニ之^ニ多^ニク^ニ存^ニ歟^ニ如^ニ何^ニ
う^ニち^ニら^ニし^ニる^ニの^ニほ^ニら^ニひ^ニの^ニぬ^ニれ^ニあ^ニら^ニし^ニる^ニも^ニあ^ニら^ニず^ニ

シケキフハ如雨脚詩ニモ作レリ

七日ナミカくくむ仙のくせと

七日々々ニ仏支經文多之

地藏菩薩因縁經 十輪經等ニ殊ニトケリ

もろびひてらぶとに

伊セ物語ニ 任佗又今ハ浪ト山里ニ 身ヲカクスヘキ宿來テン

みれまよめれとあ任何は

東京西京 京政 各ニ貞

西者右京弘仁十年十一月廿日符九右

いとむと

鴿也

和名云伊倍八玉

本草云 頸短灰色也

まぐまが

健也

菅家後集ニ見タリ

女いたぐやうりふ

陽體剛強自在陰柔順從陽婦人者

有三從之禮每自專之義

五行大義才ニ才七論徳

まさこにちささあ

八月九月正長夜

千声万声無正

時 白氏文集

まもせだのまよこしにめん

子ヲナノケルシカルラニ君ヨリモ
ワレリニスタノイケルカヒナキ

うつせこのをいさつとあつしを

万葉ニ

ウツセミノ世ハ常ナシトシル物ヲ
秋風サムミシノヒワルカモ

あまうりあふん

本終

たうやうなるたぎさうつけて

後撰 小野宮也 大臣

秋大補カ太秦ノ

帝成家ニ侍ニサ秋葉ニ文ヲサシテツカハシケル

山郷ノモノサヒシサハ秋葉ノ
ナヒクコトニラフモヒヤラル

こつとむまにまよこしとあつさあハまぬへま

コリスニニタモナキ名ハタメニ
人ニクカラヌ世ニシスニハ

あつせのほれをにて

李部王記云天慶

八年正月十八日乙卯戌時室正五位下藤原朝臣寛子卒

年四十二月八日當ニニ七日於叡山東法華堂 終諷誦布施

名香一裏僧施錢 五百文

竹筥日記云 此男泪不尽 泣其詞ヲ硯水ニテ法華經ヲ書

テ此叡ノ三昧 堂 在止觀院西也

弘仁三年壬辰四月廿日結構秋七月上旬土木ノ功甫就

移行法華長講延曆寺縁起

もんざう文章博士也

かんしむつ願文也日本記 清和天皇貞

觀九年十月勸学院南邊更建一院号延命院乃至

自製願文詞多不載正身自願文作事此所例歟

け福造經出迷津有經文

四十九日返中右漂心歎己先六道輪迴未定之間造佛

造經出迷津有經文

カコツケニヲチテ也

かコトク也

ま玉鬘曼ノ也女子ヲモ若君ト云年

若キ心也

法事也

たむけ

饗礼也

又醮也禍

禍餞別

亦云

手向或酌祭礼

ぬき

後麻也

鞆中ニテハ

道祖神ニ手向ル故ニ是ヲ

旅人之送物ニ自古来仕集ル也

コノタヒハサモトリアス手向ル

黄帝四十余子有寂末子旅行ノ遊ヲ好テ敢テ不留干

寂中ニ云遂ニ旅遊之道ニテ死ス其時哲言テ曰吾為神旅

行之客ヲ可守其名ヲ号遊子今道祖神也乃旅ニ赴ク

時餞送ト云事故也餞送之所トハ祖席云此道神ヲ世

俗ニサヘノ神共号手向神

たむけ隆家下リノ時自中宮餞ニ扇ヲ遺シ集ル

涼サハイキノ松原ニサル所

ソフル扇ノ風ナワスレリ

逢ニテノカタミトテコソ留ナケメ

泪ニウカハモクツナリケリ

せみれをもたらしめてくる夏衣久しそをりてしきるひるも
り

有シ薄衣ニ冬ノ装束ヲ添テ遣シケル歟仍立サテケルト云歟ニ
ふぞ多き所日ありタリ

本終

とみしむるふりこくもしこきこに切方志に秋の言ハ

秋宮女御集ニ

スキニシモ今ユクホモニ道ニ
ナテワカレノナキ世ナリケリ

此哥同心也

物語哥古哥ニ相似ル例多之

或亦古哥ヲ取テ今讀タ
ルヤリニカケルコトモアリ

伊勢物語ナトニモミタリ 空蟬

卷ニ註付タリ

物いひさびさかきつとるもどらめり

爰ニシモ何句ラン女師範
人ノモノイヒサカニクキ世ニ

